

俳句雜誌

令和八年四月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十九卷第四号

水 明

2026 4月号



《今月のかな女》

蕾もつ草をおぼろに踏みしかな

『龍膽』『雨月』所収 大正十一年

長谷川かな女

かな女が大正八年に、自宅の庭の畑で米国の飛行士スミスの宙返り飛行を観ていて転び、左足首を捻挫した。それが原因で大正十年の秋にひどい痛みを発症し、脚の切断は免れたが松葉杖での生活となった。こつこつと松葉杖を頼りに家の中を歩き、たまに庭に出て気晴らしすることがあったようだ。朧夜に庭を歩き、松葉杖の先や右足の下に、萌え出た柔らかな草の感触を愉しんでいたのだが、やがて、その草のそれぞれが花の蕾を持つていることに気付き、自分の配慮の無さに心を痛めた心境を詠んだ俳句であろうと察した。

(鬼之介・註)

今月の巻頭句

季音雪

武甲山の影絵の遠し寒の水

網野月を

季音月

寒の明け天金の書を書棚より

青木鶴城

季音花

専女とて紅も差します水仙花

清水桂子

水明集

冬の靄まぼろしのごと一里塚

霜多光代

山紫集

いの一 番臨月の子に若水を

森和子

水明

令和 8 年
4 月 号

今月のかな女

今月の巻頭句

天 満 宮 (作品)

山本鬼之介

初 地 蔵 (近詠)

山中みどり

新 宿 (近詠)

境 延昭

雪 嶺 雪欄作家作品鑑賞

染谷風子

ゆ ず り 葉 季音月評

檜鼻ことは

季音「雪」 (同人作品)

網野月を 石井喜恵
井上燈女 ほか

季音「月」 (同人作品)

青木鶴城 正木萬蝶
大場順子 ほか

季音「花」 (同人作品)

清水桂子 横山君夫
池田珪子 ほか

現代俳句鑑賞

網野月を

『水明誌』を繙く

なつはづき

水明集

霜多光代 皆川更穂
反町 修 ほか

31

30

28

23

18

12

10

8

7

6

4

1



作品鑑賞

山本鬼之介

42

水琴窟（二月号鑑賞）

池田雅夫

46

山紫集

48

作品評

網野月を

52

俳誌望見

梅澤輝翠

54

句集喝采

菅原卓郎

55

水明忌の記

青木鶴城

56

例会報・各地句会報

58・61

水明の記事他紙から転載（俳壇）

66

令和八年水明全国大会のお知らせ

68

令和八年水明全国大会兼題句募集

69

風声／水明発展基金御礼

70

後記

題字・長谷川かな女 表紙・内田恵子 カット・福田千春

天満宮

山本鬼之介

春を告げたる老舗旅館の大振子

春寒やスマホを覗くチワワ犬

江戸弁の語りさはやか針祭

下 萌 や 未 だ 治 ら ぬ 転 び 癖
紅 梅 の さ 枝 に 触 る る 巫 女 の 袖
浅 春 や 散 歩 の 犬 に 愚 痴 こ ぼ す
通 ひ 路 の 池 の 蠢 動 日 脚 伸 ぶ
会 へ ず 了 ひ の 祖 父 の 遺 影 や 冴 返 る

初地藏

山中みどり

潮 上り雲を写して冬の川
風 にのる団扇太鼓や百合鷗
冬 日和明曆墓碑は母娘の名
初 地藏善男善女の着ぶくれて
冬 うらら破れ幟のお焚き上げ
振 舞の甘酒ぬくし初地藏
去 年逝きし君の名もあり冬幟

隅田川にかかる厩橋、江戸時代対岸にお米蔵があつた藏前である。私の家の前の道が川に突き当たつた土手には「お厩の渡し跡」と木柱があつた。これにちなみ厩橋の名となつている。俗に振袖火事といわれる「明曆の大火」江戸市中から水辺に逃れて沢山の死者が累々と積まれ、その屍を厩橋と今の駒形橋の中程で焼いたと伝えられている。現在、夏の隅田川花火の打ち上げ場所であると言う人もいる。私の住む本所一丁目の町会では毎年一月の二十四日を初地藏と決めて供養行事を行う。防災部の若い人達がテントを張り、女性部が甘酒やみかん、お餅などを参拝者に振舞う。子ども達から高齢者迄、老若の善男善女で橋際はひととき賑わうのである。

新宿

境延昭

新宿通りを春塵の選挙カー
春寒し織江の二丁目この辺り
春の雲御苑の空が狭くなる
天と地下へと伸びる新宿春満月
西口の思い出横丁春の酔ひ
春宵の駅構内に未来絵図
安曇野は遥か彼方や夕霞

白井吉見著「安曇野」の復刊を知った。相馬愛蔵・黒光夫妻が本郷東大前にパン屋を開業してからの中村屋を主軸に、夫妻を慕う同郷の芸術家をはじめ明治から昭和に至る登場人物約二千人の壮大で多彩な交友の様子を描れる。インド独立戦に関り国を追われたラス・ビハリ・ボースを匿ったのが縁で長女俊子が頭山満の媒酌で結婚。戦後その息子が三代目社長を継いでいる。

「安曇野」で中村屋を知った者として、復刊の反響など知りたくて中村屋三階のサロン美術館を訪ねたが無駄骨であった。

雪 嶺

季音雪欄作家近詠鑑賞

染 谷 風 子

◇庭の四季（一月号）

永野史代

◇望郷（一月号）

茂木和子

冬 浅し 白花 黄花 多き庭
皇帝ダリア己が心を見透かされ
秋明菊のやさしき白を愛でてをり
白小菊故郷より持ち来いま盛
つはぶきは夫研究の花よく咲けり
冬蝶の狭庭をまはりつつ消ゆる
枯れ一面わが生涯も枯れ半ば

作者は、令和七年度「かな女賞」受賞、昭和四十五年に水明入会、水明歴五十七年、二代目主宰長谷川秋子氏より直接指導を受けられている。今回はご自宅の庭の景七句を詠む。

一句目、初冬の庭の景、「白花黄花」は冬菊か。〈黄菊白菊其の外の名はなくもがな〉（嵐雪）を彷彿させる。二句目、「皇帝ダリア」は晩秋の花で成長すると三米以上になる。その迫力から「ダリアの王様」と言われ、晩秋の庭で一際その存在感を顕す。作者はその存在感に圧倒されている。三句目、一転して、小さく可憐な秋明菊の白を詠む。白は秋の象徴だ。四句目、中七を九音にして終止形で切れを作り、眼前の「白小菊」を詠む。破調が効果的である。七句目、心境前。「白のエッセイによれば、晩秋から初冬の頃が一番美しい季節、人生も同じだとある。正に同感である。作者の俳句人生も今が美しい盛りである。「皇帝ダリア」の如き大輪を期待する。

木 酩の 頃 合ひ 狙ふ 鳥 獣
リュックより取り出す土産枝葉柿
かまきりの未だ枯れ切れぬ草の色
枯 蟪 螂 屋 敷 稻 荷 の 裏 扉
荒 草 に 眼 鋭 き 枯 蟪 螂
残菊に日の当りたる微香かな
残菊や未だいささかな志

新しく瀟洒な面と、昔と変わらぬ自然と生活とが混在した作者の生活圏の吟行七句。一句目、「木酩」（きざわし）は甘柿のこと、その代表的品種が御所柿である。添付のエッセイによれば、立派な長屋門、白壁の土蔵、広い屋敷を構えた旧家には庭の果実を狙って白鼻心も出没することのこと。下五の獣は小狸に似た愛敬のある白鼻心であろう。鳥も獣も人間も甘い物が好物だ。二句目、枝葉柿は作者の庭の産か。相手の満面の笑みが見えてくる。三句目、秋が更け、野の草は枯れて褐色になるも、自然の法則に逆らう蟪螂は緑のまま。五句目、「蟪螂の斧」の喩えの通りのその気の強さを詠む。「枯蟪螂」は初冬の季語。交尾を終えた雌は雄を食い殺し、産卵を終えると後は死ぬのみである。作者の見た枯蟪螂は未だその気の強さを眼光に残したまま。七句目、「残菊」に心を託し、未だ衰えぬ俳句への情熱を力強く詠んだ心境句だ。

◇郭公の杉（二月号）

菊池ひろこ

青芝の子ら撮りためて出征す
覚め際に郭公が鳴く雑魚寝かな
井の底に郭公の杉影なせり
城趾とは桜並木につづく坂
城址の土より剝がす杉落葉
祖母にその母ゐて鳴らす青鬼灯
赤蜻蛉東京指してホバリング

作者の疎開経験の回想七句。昭和十九年六月、サイパン、テニアンを基地としたB二九の空襲に備え、政府は「学童疎開促進要項」を閣議決定し、国民学校三年生以上の学童疎開を強制した。縁故疎開を原則とし、不能な児童は集団疎開である。添付されたエッセーに就学直前の作者の親族総勢九人の疎開生活が活写されている。一句目、出征兵士は村人か。上五、中七からすると妻子ある身の赤紙による召集か。読者の胸を打つ一句である。二句目、疎開者九人の二間での疎開生活。私の生家にも大叔母一家が疎開していたと生前の祖母より聞いている。三句目、釣瓶井戸で米を磨ぎ、洗濯をする母上の姿。作者には忘れられない光景と思う。四句目、五句目は盛岡城址を詠む。盛岡城は別名不来方城と称し盛岡駅の近くに所在する。盛岡中学の生徒であった石川啄木は「教室の窓より遁げてただ一人かの城址に寝に行きしかな」と歌った。七句目、東京を頻りに恋しがる作者の心境句。私の高校の恩師は山形に集団疎開し、夕方になると東京の空に向かって毎日泣いたと話していた。これは作者の警世の七句である。

◇古峯神社（二月号）

石山かつ子

冬麗や磨き丸太の大鳥居
講中の同じ絆纏冬うらら
北風や社の千木に天狗面
大釜に湯の滾りをり古暦
昼の祈禱はじまる知らせ山眠る
直会の湯葉の巻物着ぶくれて
食堂は坊百畳の冬日和

栃木県鹿沼市の古峯神社の吟行句。同神社は日本武尊を祭神とし、併せて神の使者である天狗を祭る。日本武尊が駿河国で野火の難に遭遇した際、叔母の伊勢神宮斎宮倭姫命より与えられた草薙剣で草を薙ぎ払い難を逃れたと言う『日本書紀』の記述に基づき「火防の神」として信仰を集めている。一句目、丸太の大鳥居は三の鳥居で境内の橋の手前にある。この質朴な鳥居を潜ると一段と荘厳性が増す。二句目、日本武尊は、火防、開運、海上守護、五穀豊穰、交通安全等あらゆる心願成就を導く神として信仰を集め、各地に多数の講中が組まれている。茅葺の大拝殿に隣接して大小の参籠部屋も完備している。五句目、祈禱所は百畳を超える大広間。大きな天狗面、天狗立像が左右に置かれ、左右の欄間に日本武尊の逸話の絵が多数掛けられている。六句目、直会は二百畳の大広間で誰でも利用できる。私の体験では巻織汁と味噌蒟蒻が美味であった。七句目、実感句。南面はすべて大きな硝子戸で冬日が満遍なく差し込んでいる。併設の回遊式日本庭園「古峯園」は四季折々の花が楽しめ、秋の紅葉が特に有名だ。

ゆずり葉

◆季音二月

檜鼻 ことは

鷹匠の風を測つてゐたりけり

石山かつ子

古来、鷹狩は天皇が行う儀式のひとつであったと伺いました。平安時代には貴族たちの間で流行し、やがて武士の時代になると、鷹狩は単なる趣味ではなく、権力者たちが「自分の力を見せる」ための重要な儀礼となつていったそうです。鷹狩の歴史をたどると、鷹狩はただの狩りではなく、政治、軍事、儀礼、そして自然との関わりを総合的に表現した文化であつたことがわかります。

句は鷹匠の姿を詠んだ一句。冒頭の「鷹匠の」の措辞だけで、野外の広がり、張りつめた鷹狩の場の様子、そして長年経験を積んだ鷹匠の人物像が浮かび上がり、同時に、肌感覚で風の気配を感じ、鷹を放つ前の鷹匠の緊張の一瞬の姿が伝わってきます。静謐で凜とした響きのある格調高い佳句です。

生き甲斐も生き恥もあり除夜の鐘

近藤撤平

生きている限り、恥をかくことは誰にでもあることですが、それは生きていることの証左でもありません。また、生き甲斐とは、生きていく上での喜びや張り合い、そして「生きていてよかった」と思える対象や価値のこと。思い出すのは、映画「男はつらいよ」の寅さんのせりふです。「何と云うかなあ、あー生まれてきてよかった。そう思うことが何べんかあるだろう。人間そのために生きてんじゃねえのかな」長く生きていると、良い事ばかりではなくて、むしろそうで無いことの方が多いのかもしれない。少し観念的な上五・中七の措辞ですが下五の「除夜の鐘」が句を引き締めています。除夜の鐘を聞きながらこれまでとこれからの人生を思う年越し。静かな余韻がいつまでも残る一句です。

手袋のままの握手で別れけり

川崎道子

前後の事情はわかりませんが、読んでハッとした気持ちになつた一句です。「手袋のままの」の措辞が、この句の核心

です。手袋を通しての握手に、寒さだけでなく心理的な距離感やある種のためらいのようなものを感じます。手袋を外さなかったのか、外せなかったのか、言外の事情を説明することなく滲ませるように語られている措辞。抱擁でもなく会釈でもなく、手袋をしたままでの握手。形式的でありながら、最後に残された精一杯の触れ合いの一瞬间に、作者の別れへの思いが込められています。下五の「別れけり」は静かな詠嘆。感情や事情を説明せず、出来事として淡々と述べることで、読み手に切々とした余韻を残す一句です。

偕老や句にほころぶ鯽の鍋 新 曆文

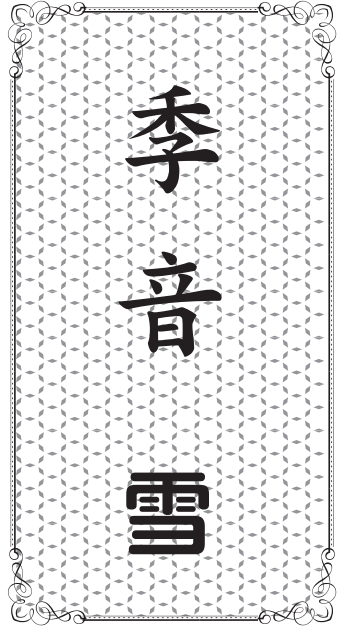
冒頭の「偕老や」の措辞がとても印象的な一句です。「偕老」は説明するまでもなく、夫婦がともに末永く仲良く暮らすことですが、ご夫婦で歩んでこられた時間の積み重ねが句の底流にあることを知らされます。そして「句にほころぶ鯽の鍋」という巧みな表現に感服しました。脂の乗り切った句の鯽、その「句」を「ほころぶ」と言い切ったことで、鍋の中で身がほどけゆく鯽の姿とご夫婦のにこやかな表情のゆるみがかかるように伝わってきます。句の恵みを楽しむご夫婦の喜びの情を隠すことなく正面から詠まれた一句。読み返すほどに味の出る佳句です。

金柑挽ぐ青空高く手を伸ばし 野平美紗子

のびやかで、気持ちのよい一句です。澄んだ空気の中、金柑の橙色と冬の青空の対比が鮮やか、爽やかで美しい光景が目につかぶようです。庭の金柑は冬の陽を浴びて艶やかに光っていたことでしょう。たわなに実りちようど食べごろ、手を伸ばせば何とか挽ぐことができそうです。少し背伸びをしている作者の様子が目に浮かび、身体の動きが句に立体感を与えています。にこやかに、一つ二つと金柑を挽ぐ作者の姿のなんと微笑ましいことでしょう。明るい冬の日差しと作者の日常の一端が心に残る佳句です。

白葱の甘さほんのり今朝の汁 宮崎チアキ

冬の朝の食卓。特別な日の料理ではなく極めて日常の朝の食卓を詠んだ一句です。白葱は加熱することで甘みがまし、特に冬の汁物には最適な野菜の一つだと思えますが、「白葱の甘さほんのり」の措辞から、そのことが沸々と伝わってきます。白葱の甘さは控えめで品があり、舌にほのかにのこる余韻のような甘さ、その甘さが「ほんのり」という一言で巧みに詠まれています。ご家族とご一緒での食事なのか、お一人での食事なのか、いずれにしましても、特別な料理ではなく、日常の食事だからこそ、白葱の甘さが心に残る。その生活感が、この句を温かいものに行っているように思います。白葱の汁物でいただく朝ご飯、つくづく日本に生まれてよかったと思える朝の食卓です。



音なき音 石井喜恵

一刀の隙なき構へ初稽古
衣擦れの音なき音や雪女
風花や湖上に烟る大鳥居
水下魚釣る深く静かな水の底
大寒の閻王ぐわつと口を開く

寒 水 網野月を

生きる長旅 井上燈女

武甲山の影絵の遠し寒の水
井戸水を汲みおく鍋や臼起
困民の郷を潤す寒九の水
紙漉きの風呂に合せる芋の糊
寒の水柄杓に掬ひ音楽寺

省くこと出来ぬ組紐冴返る
冬の夜や生きる長旅継ぎ足して
人を恋ひ言葉に飢うる冬の夜
梅三分どの道行くも山に入る
軋む戸をなだめ開きて鬼やらひ

息吐くやうに 石山 かつ子

寒 四 郎 大村 節 代

嚴寒の鋼打ち込む刀鍛冶
大寒や釘の飛びつく棒磁石
大寒や息吐くやうに独り言
專業は主婦と答へて春を待つ
春寒し足踏んばつて独吟す

さつそうと雲水の行く冬の朝
三味をひき影もてあます雲をんな
雪女郎峠越ゆれば伊勢街道
雪の中追ひ込む勢子の息あがる
思ひ出の人みな遠し寒四郎

蜺 汁 大橋 廸 代

下 萌 菊池 ひろこ

氷柱長し死して金魚は花となる
ピザはこぶ籠は三角桜東風
朝東風やまなじり決し列なす子
腹這ひて覗く三人東風の崖
三日めや有無を言はせぬ蜺汁

雪降り旧居の道の巾いかに
下萌や野外観劇暮れなづむ
下萌のスロープ電車音かすか
葉先より力ぬけゆく水仙花
紅柄の紅の香か二月の路地

冬来たりなば

五明

昇

春の月

島津初花

天網の小さき綻び風花す
焼藪に湿る戦火の子らの記事
築百年を知り尽くしたる隙間風
腓返りを宥め大寒遣り過す
立春大吉遊歩は富士の見ゆる迄

寺の屋根反り麗しき春の月
ちぎり絵にひかり零れし春の月
立ち竦む午前三時の春満月
香木の匂ふ座敷や春月夜
恵子画のモデルは美人春を待つ

砥部の角瓶

境

延

昭

日脚伸ぶ

鈴木康世

厳寒の薄く瘦せたる明けの月
白地に呉須の砥部の角瓶水仙花
門柱にSECOMのラベル冬館
春暁の夢に割り込む六つの鐘
七七日忌の経は早口春立てり

世を隔つ玻璃戸一枚日脚伸ぶ
日脚伸ぶはや蠢動の土手となり
家の影日毎に退り日脚伸ぶ
葉隠れに咲く侘助の花一輪
四阿に姉妹の揃ひ初音聞く

東 風 十倉和子

赤子はや這ひ這ひはじめ春隣
釣具屋の魚拓を揺らす椿東風
東風の中ぐいと踏んばる四つ手網
選挙カー行き逢ふ東風の交差点
初音かと耳すましをり伎芸天

底 の 底 永野史代

大寒や造幣局に大金庫
大寒の底の底なる父の声
染色屋寒九の白布翻へす
左義長のつひの炎の燃え立ちぬ
どんどの火激しきときはみな寡黙

季 の 花 鳥羽和風

季の花の水面春めく三方五湖
川底に何やらかやら春動く
雪の果妻の墓石に白帽子
春炬燵郵便受けに文の音
歳時記の春炬燵見る春炬燵

煉 切 星野和葉

一日をお喋り三昧小正月
知り尽くす我が好物を寒見舞
アンパンマン飛ぶ絵はがきの寒見舞
目を瞠る菓舗の煉切春めけり
初午や烈しき音す幟旗

鉄 路 町 野 広 子

公園二つ繋ぐ木の橋冬ざくら
冬桜ポニーに乗りたき列長し
大寒や鉄路に遊びといふ隙間
棒立ちの街路樹続きたる寒九
持て成しの珈琲寒九の水沸かす

春 浅 く 松 井 由 紀 子

樹に倚れど樹は黙のなか春浅く
髭面の写真へ香るヒヤシンス
岩陰を出る魚のごと春の旅
ひとつづつ物忘れして二月尽
春めくや書架にオーパ!!の撓り竿

寒 見 舞 茂 木 和 子

寒見舞葉書飛び出す干支の午
平飼ひの鶏卵届く寒見舞
藁苞や今は昔の寒見舞
森林やせて熊の出没あはれなり
攻撃を受けてさ迷ふ手負熊

梵 鐘 森 川 義 子

境内に朝の箒目淑気満つ
朱の橋を艶やかにして寒の雨
梵鐘の余韻のこして冬夕焼
厳冬の戸締り早き山家かな
寒鰯や海の男の活気づく

鱒 東 風 森 本 早 苗

鱒 東 風 妣 の 味 噌 漬 今 一 度
強 東 風 や 行 列 続 け た こ 焼 き 屋
梅 ふ ふ 優 し さ 滲 む 師 の お 声
梅 花 節 や う や う 雨 の 止 み 始 む
蠟 梅 の 香 に 面 影 の 重 な り ぬ

冬 茜 山 中 み どり

紅 燈 の 屋 形 船 ゆ く 冬 の 川
冬 茜 青 く 輝 や く ス カ イ ツ リ
亡 き 人 を 不 意 に 恋 し き 冬 茜
冷 え て ゆ く 指 想 ひ 出 す 冬 茜
善 く 生 き 残 さ れ し 刻 冬 茜

特集

大学俳句会の現在

北大俳句会／東北大学学生俳句会

福島大学俳句会／新潟大学俳句会／短歌会

筑波大学学生俳句会／桐一葉

都留文科大学俳句会／東大俳句会

早稲田大学俳句研究会

愛知県立大学短詩同好会「うたかた」

新中大俳句会／関西俳句会「ふらこ」

愛媛大学俳句研究会

岡山大学俳句研究会／九州学生俳句会

●今月の華

なつはづき／矢野景一

●巻頭三句

今井聖／岸原清行

岡田一実／大高翔

清水伶／今瀬一博

●俳句と短歌の10作競詠

若杉朋哉＋鍋島恵子

●人と作品

内村恭子句集『多神』

追悼・茨木和生

谷口智行／杉田菜穂

朝妻力／中村雅樹

森田純一郎

「菜の花」吟行記 平賀節代

池田宏陸

館野まひろ

中矢温

●好評連載

成瀬政博

とありあえずの日々

浅川芳直

俳壇ランドスケープ

青木亮人

句の手触り 俳人の響き

大西朋

俳句へのまなざし

橋本喜夫

俳句のレトリック

神作研一

てのひらの江戸

―古典籍を旅する

藤村公洋

俳句のつまみ

穂矢まりえ

諸家書架

石井隆司

たもとほろ

俳句よもやま話

二ノ宮一雄

一望百里



2026年4月号

3月20日発売
定価1300円(税込)

https://www.tokyoshiki.co.jp/ 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

季音月

地に足

青木鶴城

寒の明け天金の書を書棚より
 露の臺父の論しと反骨心
 春の星安寧の道修羅の道
 丹田に力地に足春疾風
 雁帰る浮き木の風呂に時あはれ

皇子の恋

正木萬蝶

左義長やジャンヌ・ダルクが立ち上がる
 丹田の日毎にゆるび日脚伸ぶ
 張込みの刑事の欠伸や日脚伸ぶ
 草萌や人馬気ままに都井岬
 下萌や標野に皇子の恋の跡

宮太鼓

大場順子

地図になき所へ遠出日脚伸ぶ
 子の誘ひ心にぬくめ春を待つ
 硯海に垂らす一滴寒明くる
 銀鼠の雨に銀鼠猫柳
 立春の序章となりぬ宮太鼓

水鳥

原田秀子

水鳥のかすかな寢息ゆるる水
 水鳥にはかせてみたきトウシューズ
 灰の尉はらりと落ちぬ冬の夜半
 冬の暮幽鬼が黒き幕を引く
 あくる日のしあはせ恃む冬の夜

富士

近藤徹平

厳寒や富士は渾身煌めきぬ
 水鳥や儀装馬車行く二重橋
 麗かや銀座の正午告ぐる鐘
 朧月独り旅立つかぐや姫
 極寒や軒のタオルが棍棒に

海鳴り 曲淵 徹雄

有磯海の海鳴りの這ふ雪野かな
燃え尽くる逢魔が時や冬夕焼
繩飛の蹴つては降るる己が影
大白鳥二羽に傾く湖面かな
夕空を飛行機の腹日脚伸ぶ

軽重を問ふ 日高 道を

軽重を問はれ沈黙春まだ来
冬夕焼天を突き刺す塔二つ
冬椿不開の門の内に咲き
住所不定年齢不詳浮寝鳥
地球は永遠に水の星か年尽く

春動く 池田 雅夫

春動く列島白き山脈やまなみも
風音に樹樹の昂ぶり春の山
山巒に射し込む朝日木の芽時
弁天のふくみ笑ひの暖かし
龍神の肝より出づる水温む

春の雨 梅澤 佐江

墨香る釣果の魚拓春隣
落城の名残の土墨草青む
カリヨンの響く広場や花ミモザ
朧夜の心に秘むる砂時計
春の雨八橋の紅艶めける

臨書の墨 丸山 マスミ

大寒や膝を詰め合ふ屋台の灯
立春や舳先沖へと朝日へと
春兆す臨書の墨の香しき
下萌えや昔耀かがい歌に沸きし里
真打の自在な話芸春の宵

梅が香 松宮 保人

産土に柏手打てば初山河
言祝ぎて皆に茶を汲む年男
冴返る什物あまた無住寺
梅園や白の眩しき青き空
トンネルを潜れば梅が香湖の色

初景色 檜鼻 ことは

無住寺の庭の片隅花八手
七草や年に一度の馳走の日
小寒や一気に飲めぬ今朝の水
新しき村の生活 初景色
大寒や白寿の伯母の枕経

春到来 河野 はるみ

草萌や「お名前なあに」園児踏む
草萌や免許返上女夫ぶら
バス停におしやべり尽きぬ黄水仙
相傘に入るひともし春の雨
手作りの赤飯も有りバレンタイン

一葉の井戸 石川 理恵

善哉を温めなほす寒九かな
寺町を寒九の風に吹かれつつ
一葉の井戸ときぎはし日脚伸ぶ
マリア像の薄きほほえみ日脚伸ぶ
火傷するほどのココアに春を待つ

寝正月 荒井 俱子

屠蘇祝ふ朱の盃も五十年
生き様と似たり寄つたり絵双六
寝正月退屈と言ふ疲れあり
厄年はもうなき齡寝正月
大気さく禽の一声 冬館

天鷲絨 福田 千春

下萌ゆる朽ち始めたる切株に
天鷲絨の手触りが好き猫柳
猫柳ゆらし昼休みのランナー
本棚に昭和歴史書黄砂来る
ぴりぴしと柱泣く音寒九の音

絵本 内田 恵子

大寒やつくばひの水透き通る
縁側で猫と受け取る寒見舞
冬桜交代で押す乳母車
大好きな絵本を二冊寒見舞
夢のひろがる天体観測寒昂

芽吹き 大塚茂子

春めきて田は蠢動をはじめけり
豊なはり秩父連山浅き春
たんぽぽや三歳にして頑固もの
踏まないで群れて可憐な犬ふぐり
摺子木は兄の手作り木の芽和

ハートのバッグ 野口和子

挨拶の子らや変声期春の朝
はだれ野や閉ざされたままゴルフ場
休み明けコンビニ灯る春の霜
初雪や空から届く贈り物
針供養やハートのバッグ縫ひ上がる

立春 飛永鼓

春の月弛緩ゆるゆる覚えたり
もやもやを連れ去り行くや春一番
春一番途方にくれる血圧計
庭の木木目を覚めよと吹く春一番
舞ひ上がる龍のごとくや杉の花

内輪差 原田自然

自動車の内輪差知る春の雪
若狭なる風に梅の香湖畔道
観梅や身体ななめにカメラマン
あと五年決意を語る梅の花
一本の梅の木雀の居場所とす

歌碑の前 松島寛久

初鏡祖母の面影長女の目
御先祖と猫に「ただいま」旅始め
外猫の時は知らず冴返る
門礼者しばし讃岐の歌碑の前
梅千輪万輪の路独り行く

山茶花 西浦千枝子

山茶花を一本残し地鎮祭
分け入りて山姥となる樹氷林
冬帽子の縁をつまみて読む梵字
語り部はおほむね女東風山路
他府県の車混みあふ梅林

より道 松山清子

風花や広き靈園まどひたり
より道の小さき靴屋にブーツ買ふ
春の雪振り払ひつつ投票へ
転びかけ踏ん張る足もと春立つ日
ひとしきり冬の五輪を応援す

選挙ポスター 田中章嘉

福豆を拾ふ小犬も厄払ひ
豪雪や選挙ポスター皆笑顔
雪掻きし選挙運動晴れ間なし
立春の水音速し雪消川
公魚や氷に跳ねて生終へる

俳句

4月号 予告

3月25日発売

巻頭作品50句 小澤實
作品21句 井上康明・山西雅子

尾崎放哉没後一〇〇年

集 孤と独 —— 自己との対話

特

【総論】俳句と孤独

【各論】放哉と山頭火／自由律俳句と孤独／

「孤」「独」の入った俳句／孤独とユーモア／
孤独に似た感情／孤独と美の関連について

【鑑賞】孤独を剥き出しにした名句

令和7年度 俳人協会四賞決定！

追悼 茨木和生

角川俳句賞作家の四季 春……千野千佳

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>) など電子書店で購入できます。
発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

季音花

専女 清水桂子

午年にあやかり飛躍初句会
 万両の隠れ上手や深き紅
 伝言のメモの癖字や寒に入る
 専女たうめとて紅も差します水仙花
 厳寒の釧網線に見る夕日

雪野 横山君夫

遠き灯は我が家の明り雪野ゆく
 雪野原小鳥は影を落としゆく
 待ちわびて真の山河や白鳥来
 若井汲む桶に白雲揺れてをり
 冬茜漆黒の富士際立たす

一月 池田珪子

赤松の続く小径の淑気かな
 切干に少し残れる薄緑
 猫車大根一本落しけり
 マフラーに顔まで埋めて始発待つ
 山唸る今夜あたりは雪女

四股を踏む 保坂翔太

狐火や化かされぬとぞ四股を踏む
 雪催三日遅れの貨客船
 寝る前の白湯の一杯霜の夜
 捨てがたき天動説や初日の出
 「金さん」が裁く一件寝正月

冬の暮 越田栄子

大根漬く母の漬物石でんと
 冬の暮急に無口に母待つ子
 深爪の疼き深深冬の暮
 風神の天翔る音冬の夜
 鉄瓶の細く湯気吹く寒夜かな

博多帯 染谷風子

火の粉吐きD五一走る雪の原
水鳥は北斗の如く陣を張り
御降や濡るるも粹に博多帯
寒き夜に一差舞ふや黒田節
陸奥の飛白のもんぺ春まぢか

卒業 渋谷きいち

薄氷をよけて清めの柄杓くむ
胸の痞下りて薄氷流れけり
野辺焼きの匂の残る夕餉かな
露のたう踏まぬやうにと母の杭
卒業や演歌軍歌の二次会場

望春 菅原卓郎

寒肥にゆるり脈打つ大地かな
ご城下に嘗て午砲や山笑ふ
里山に迫る勢子衆春隣る
チクタクとぶれぬ振子や梅月夜
忸怩たる猫の恋路や独木橋

強運 新曆文

立春の風に暖簾の影長し
強運は祖先のお陰寒椿
薄氷を割れば小鳥の水飲み場
香り立つ畦の影より露の花
露の芽や石も温みて香りけり

初句会 笹本啓子

寝正月暈で暮らす犬とをり
初句会披講の声の朗朗と
緊張と笑ひもありて初句会
校庭に置いてけぼりの雪達磨
泣き顔になりさう盆の雪兎

春の立つ 下川光子

とびきりのややの笑顔に春立てり
立春大吉こんなところに家の鍵
百円の小松菜を買ふ長屋門
こんにやくも豆腐も四角針供養
路地裏のきじとらの猫恋の猫

桜餅

梅澤輝翠

数の子を噛んでほらから皆達者
南部鉄器伝統継ぐや雪の里
あちこちに鳥の届けし実万両
下萌や延延並ぶ泥団子
作業所に新人来たり桜餅

駅北口

鈴木玲子

冬の星年古るごとに滲みけり
弾初のマズルカ弦の軽やかに
水割りのゆらり揺らめく寒九の夜
友を待つ駅北口の寒九かな
左義長の炎ますぐに天を衝く

華やぎて

石田慶子

蔵元に春着の子ゐて八代目
春着の子恥ぢらひながら見せに来る
年またぐこと無く咲きて冬の梅
母の手をぎゆつと握つてどんど焼
三寒四温今日は暮会所祖父の知恵

待春

寺内洋子

東風鳴らす天神さんの願ひ札
東風吹かば天神さんの超多忙
椿落つその潔さ羨としとも
候補者の声をひと押し春の雷
香の香を圧し水仙香り立つ

形見の腕時計

野村美子

春の夢側に形見の腕時計
熱演の独り舞台や春裕
厳寒の湯守が守る伊香保の湯
冬日和伝統菓子のティータイム
万両や庭石見事御影石

新年一切

山戸美子

懸命の動き裏目に寝正月
それぞれの干支に合はせて祝箸
関東の郷に入りて注連を取る
貴婦人とはこんな人かも初詣
絵手紙を始めましたと年賀状

草萌ゆる 宮崎 チアキ

独り居の門に目刺や節分会
踏まれても踏まれても又草萌ゆる
下萌を育む大地いつまでも
濃紫の絨毯のやう仏の座
春寒や友手作りのサポーター

チューリップ 葛城 千世子

アメーバのやうに移動の雪予報
ゆるり巻く背丈の倍の襟巻よ
東風吹くやカーナビ無視の二人連れ
花曇り眼鏡かけるもぼやけし眼
化粧して証明写真チューリップ

冬夕焼 西幅 公子

己が顔己がつくれと初鏡
子ども食堂窓いつぱいに冬夕焼
初場所の招き看板煌めけり
初雪の映ゆる瓦屋日本の美
農耕の爺の背つつむ冬夕焼

福は内 綿貫 ひさの

床の間に千両の実こぼれをり
重ね着や昭和の服もニユールック
鉢植ゑの真紅の二輪寒椿
公園に植ゑし葉牡丹轆轤首
仕来りの薄れる今日の「福は内」

冬から春へ 山岸 久美子

冬茜富士の雄姿を浮かばせり
角庭にあかり点すや実万両
春炬燵うたたね破る正午かな
山風のふはつとやさし春めくや
千古より今ある光二月かな

新年 佐々木 史女

書初に絆の一文字魂込めて
神棚へ五臓に沁むる寒の水
句作りは生きる証や年惜しむ
晩年の歳月速し去年今年
笹鳴きの天満宮に確かめに

強東風 高橋 満耶子

強東風や地面に踏ん張る鳩の群

東風の中鳩みな同じ体勢に

北窓の汚れ気になる桜東風

玉霰せんたく物を攻撃す

老鳥の世話やくインコ余寒なほ

冬の朝 野平 美紗子

冬の朝大音響の宣伝カ

庭隅に万両の実の赤々と

新春や琵琶湖の吾子から伝言が

独り居の吾なぐさむる寒鴉

寂しさに見入るテレビの初句会

寝正月 森 和子

寝正月窓一杯に輝く陽

寝正月今記さねば忘るる句

寝正月宣言するも小半時

安宿の一夜悩ます隙間風

隙間風貧乏揺すりして寡黙

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊俳句界 2026年4月号

特集
小林一茶200回忌年特集
一茶の故郷・信濃町

『七番日記』落札の裏側

インタビュー 渡辺洋 (茶記念館館長)

賞詠
井上裕太 川越歌澄 堀本裕樹
高勢祥子 涼野海音 藤井あかり

斗者
拔井諒一 西村麒麟 堀切克洋
諏佐英莉 藤原暢子 西川火尖

北賞
伊藤幹哲 佐々木紺 若林哲哉
古田秀

特集
「アートを生かした企業研修」

須藤修司・良子 (パロールラボ合同会社代表)

シリーズ 推薦!注目・期待する俳人⑤

丹野剛紀 三角尚子 木村定生

安藤文 小林史朗

セレクション結社「からまつ」石川春晃

池田瑠那 (祝!第40回俳人協会評論新人賞受賞)

句集『心柱』

評論集『境目に立つ、異界に坐す』

連載
宮坂静生 青木亮人 林誠司
石井隆司 若林哲哉 広渡敬雄
坂口昌弘 八田九郎

「俳句界」投稿欄
一流選者10名!
充実の投稿欄

※一部変更の可能性あります。



株式会社文学の森

お求めは... ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

現代俳句鑑賞

網野月を

天皇の白髪にこそ夏の月

宇多喜代子

〔俳句四季〕 1月号・結社アルバムより

今上天皇のことであろうか。それとも昭和天皇または平成の天皇のことであろうか。作者のことを考えると昭和天皇のようにも思われる。座五の「夏の月」はむろん十五夜で、満月ある。旧暦の十五日の夜の月が満月であることを想定しているのである。筆者は「夏の月」を平和の象徴として鑑賞したいと思う。

長生きの話で終る女正月

吉田成子

〔俳句四季〕 1月号・結社アルバムより

相応の年頃になると病気の話、年金の話などが話題になることが多い、子や孫の話もメンバーによつては話題になることもあるのか。亭主の話などは更々ないのである。長生きの話となるとこれはもう手練れものである。中七に「・・終る」とあるから、この話の輪はそこまで話題が行き着いたというのであろう。軽みがある一方で、実に人生を語っている句である。

枯葉飛ぶ電波だらけの空なれど

高野ムツオ

〔俳句界〕 1月号・新作巻頭より

「電波だらけの空」とは、言われてみればその通りである。そうした現実と「枯葉飛ぶ」という人間感覚的な世界と比して、読み手にどちらが良いかの答を迫っているようである。他に「Amazonで着く初荷とぞ開け難し」がある。

冬の日やセロハンがのる幕の内

加藤かな文

〔俳句界〕 1月号・メルセデスより

上五の「冬の日」はデイであろうか、それともサンであろうか。筆者は勝手にサンと解釈した。光を感じなくては、幕の内弁当の蓋と御飯の間にある「セロハン」が見えてこない様に思うからである。昨今は経木が廃れてしまったので「セロハン」なのであるが、日差しを受けた「セロハン」の彩色を愉しむのも良いかも知れない。他に「メルセデス時雨に濡れぬ跡残し」がある。

七つの海をめぐりし塩を七日粥

正木ゆう子

〔俳壇〕 1月号・鬼柚子より

構想の大きな句である。「七つの海」とは南北太平洋、南

北大西洋、南極海、北極海、インド洋であるが、この句の場合、世界中を巡ったという意味であろう。「七日粥」の効用の源である、七という数字への拘りが生み出した句である。他に「鬼袖子の悪相をもて厄払」がある。

てのひらに小さなくほみ冬の蝶 なつはづき

〔俳壇〕1月号・キスにより

座五の季語「冬の蝶」への慈しみの句である。春の、または夏の蝶ならば指先に留まらせるのであろうが、「冬の蝶」は「てのひらに」庇うのである。「冬の蝶」は何かを見立てているのかも知れない。他に「枯園やキスにきちんとした重さ」がある。

決心はいつも空振り浮かれ猫 青木鶴城
疾走に疲れ果てたる風車
生きたら迷ふことなり蜆汁

〔俳句界〕2月号・生きるより

一句目は軽みの句であろう。「浮かれ」の場合は空振りばかりである、という意である。その方が円満というものであろう。ただし裏に隠された意は真逆であろう。真剣な事々は百発百中という意味が隠されていることを見逃してはならない。二句目は句意を解説するまでもない。ある一つの人生観を感じさせている。村上春樹曰く、文学は自らの癒しである。作者も俳句において、「疲れ果てたる」を吐露して次に向かうのである。節目を作って気持ちのチェンジしているのであろう。三句目は、人生観そのもので、メッセーじ性の高い句になっている。作者は筆者よりも十歳以上年嵩である

が、それでも「迷ふことなり」と正直に言い切っている。そこには一椀の「蜆汁」に安堵されている作者がいる。

蝌蚪生まる自在に描くマチスの線
生物は海より生まれ立泳ぎ
水切りのひらたい石選り柳の芽
枇杷二つ白磁の皿に影は青
青嵐抱へる画布は帆となりて

〔句集「画布は帆」より〕

内田恵子

一句目は画家としての眼差しから「蝌蚪」を捉えた時の感慨であろう。作者は今の水明誌の表紙画を描いている画家でもあって、マチスの構図に傾倒しているのである。ただ「蝌蚪」であって、金魚ではない。二句目は「生物」の大きな大義を言い当てている。「立泳ぎ」は何を指し示しているのだろうか。究極は人類なのであろうが、もっと広い「生物」観を詠んでいるようである。三句目は座五の「柳の芽」が肝である。「水切り」を描出しながら、座五では「柳の芽」の季語へ転換している。単なる取合せの句ではない。季語「柳の芽」の本質が時空間の設定に留まることなく、「水切り」をしている人物像に迫っている。四句目は、第一句目と同様に画家としての視座から詠まれた句であろうと想像する。「枇杷」の影の青さを見出した作者は、油彩画として描写するよりも俳句にして描出することを選んだのである。形色の世界と言葉の世界を行き交っている作者がそこに居る。第五句目は句集の題にもなった句である。初夏、風の日に青葉若葉を波濤として画家としての作者は帆船に漕ぎ出すのである。

『水明誌』を繙く（水明二月号）

なつはづき（「豈」
青山俳句工場05」所属）

良夜かな網野月をは良きをとこ 永野史代

実際の網野月を氏を知っている方は「確かにそう」と腑に落ちます。「水明」の皆様は何の疑問も疑念も抱かずに一句を受け入れているのでありましょう。私もご本人を知っておりますので特に異議はありませんが、大胆にストリートに「良きをとこ」と言いきっている潔さ。驚かされました。

一句の中に固有名詞を入れるのは案外難しいです。万人が知っている名であればイメージ共有の成功確率は上がりますが、万が一知らない場合は読み手がかなり迷うからです。掲句の場合「網野月を」という字面を実にうまく使っています。季語の良夜は望の月、名月の夜のこと。ここで「良き」と繋がっていき、望の月から「月を」という名前も出てきます。それでいて中七下五が良夜の説明には決してなっていない。言葉遊びのようであり、写生でもあり、もし網野氏を知らない人が読んだとしても納得させられる一句でしょう。

月の字を持つ人は沢山います。「観月ありさ」「大月みやこ」；男性も女性も本当に沢山の名前がありました。が、「網野月を」に敵う名前はありませんでした。この固有名詞は動きません。

五百年の大樹ヘナビを天高し 葛城千世子

樹齢五百年の木は日本中でのくらいあるのか気になってインターネットで調べてしまいました。予想よりも多くの木々が出てきて、ああこんなに残っているのだと、掲句はどの木のだろう、と想像が膨らみました。季語は天高し。秋なのできつと紅葉が美しい木でありましょう。ふと銀杏の木ではないか、と思に至ります。天高し、は晴れ渡った空を感じさせる季語。真青な空とのコントラストで黄色がぱっと目に浮かびます。この色の組み合わせにはゴッホの「夜のカフェテラス」や「星月夜」などがあり、補色（反対色）をうまく使って印象的な景を切り取る事ができます。句の中で多くを語ってはいませんが、季語と大樹だけで色まで見えて来る美術的要素がある一句と思います。

掲句には「ナビ」が登場します。スマートフォンかそれとも車のナビかは解りませんが、設定するためには「目的地住所」が必要です。人間が把握できるものには辿り着けますが、もしかしたら人知れぬ山の中に、天だけが知っている大樹が脈々と生き続けているかもしれません。

山本鬼之介 選

水明集

冬の靄まぼろしのごと一里塚
凍滝の息のむ容莊嚴に
唐墨に一滴落とす寒の水
豆腐屋の桶なみなみと寒の水
雪だるま小さく握り盆の上

枯芝を疾く駆け抜ける黒鼠
ト口箱の水一閃鱒の青
長尺のマフラー分ち観覧車
護摩行の煤の積もりし金襴
厳寒の玄天を突く針葉樹

さいたま 霜多光代

皆川更穂

不夜城や迎げば白き冬の月
冬館湖畔の屋並睥睨す
多彩なり枯野の上を熱気球
夕日浴び葬列過る枯野かな
目覚むれば星の囁く霜夜かな

さいたま 反町 修

冬浪や魚群追尾の舟一つ
鈴生りやパドックに咲く春着の子
ときめくや手彫りの賀状たれからぞ
鱒酒や海峡越しに門司の街
数の子をぼりぼりぼりと祝ふ朝

利根 倉田星歩

堪忍袋を大きくしたき去年今年
裸木や明日の息吹を忍ばせて
ぼつねんと丸いポストが冬の月
あの件は忘れて仕舞へ年明くる
人日や句会の皆の笑ひ顔

さいたま 飯田忠男

囲炉裏端民話の里の火色かな
軽やかに枝かる音の冬の庭
歳の市紬羽織りて御仁過ぐ
椏と松並ぶ店先十二月
冬夕焼稜線黒く切り取られ

寺町知子

雪が降る碁石の音の軋み合ふ
焼芋の蜜がとろりとえびす顔
奈良漬の餛飩刻む冬の朝
寒牡丹仏の母に話しかけ
冬の月自分と対話する無音

さいたま 綿引まりこ

面差しは母にそっくり春着の子
年神も高く舞ひたるとんど焼
無垢な眼の神馬迎ふる除夜詣
大絵馬の馬蹄の響き初詣
手づからの巫女の真心餅の花

平塚 丸屋詠子

穏やかに夫黄落を見つめをり
なにもかも手放す夫の聖夜かな
酸素マスク外す歳晩の第9
作り置きしお節をつまむ寡婦我は
窓開けて一面の雪死を悼む

本橋稀香

大陸はもともと一つ冬至風呂
がやがやと肩組んで来る年忘れ
履歴書の空欄埋むる除夜の鐘
初雪やからくり時計の廻る音
初春や真つ直ぐに道続きをり

さいたま 石関六弦

久闊の時を一気に温め酒
吾を揺らす波濤に冬の月も揺れ
端然と住まふ平屋や冬の月
終バスを降りひとり占め冬の月
不確かな約束はせず忘年会

田中弘子

松過ぎて飛ぶさしめんのかつを節
脳細胞は日ごとに替はり去年今年
みちのくの背骨は太し雪下し
初夢や白い孔雀が満開に
冬鳥の九羽集ひて吾を無視

森下山菜

「元氣か」と兄の声のせ塩鮭来
冬ざれや貝塚眠る町外れ
冬の朝冷気乗り込む始発バス
音もなき前触れの夜や雪催
若冲の「涅槃図」めける大根かな

越谷 阿部幸代

短日や玻璃戸の映す部屋の中
有終の卒塔婆小町や枯芙蓉
家系図を広げ夜咄祖は源氏
禪を締めてかかるや初衣裳
雪女玉三郎は紅を点す

小林京子

ポインセチア誘ふカフェの窓の席

さいたま 岡田宣子

下町の名残の長屋実千両

屋根洗ふ職人一人小春空
幼子に小さなおまけ焼きいも屋

さいたま 穴戸洋子

初雪の微かな重み傘の上

冬ざれや真夜の紅茶の踊り出す

波音を残し消えゆく冬夕焼

冬ざるる点つる形見の志野茶碗

千鳥鳴く警女の辿りし越の浜

冬ざれの津軽の空や撥が鳴る

冬蝶よ力尽くまで野に遊べ

菅原真理

上尾 室井早都子

聞こゆるはランナーの息枯木道

約束は過ぎぬ冬木の影まばら
冬ざれや車窓に瞬時己が顔

ささくれ立つ心を包む風花よ

空堀の底の倒木冬ざるる

裸木に命脈脈空青し

無線叫ぶなる夜の冬木風

行く子らに光零すや福寿草

焼藪のはみ出す包み夫婦宅

白樺の林誰を追ふ雪女郎

吉川 杉浦千祐

若狭 岡本祥子

鱷背な車夫の勢浅草初詣

剥き出しの露地栽培や寒波来る
浮き雲のドラマチックや初景色

影落とし鶴の群れ飛ぶ猊鼻溪

臘梅の辺りを制す凄まじく
ものの芽の繰り出す葉色土の色

鱸酒の焰白木のカウンター

春淡し片言話す一才児

武蔵野線句会帰りの寒茜

枕辺の小さき長靴クリスマス

さいたま 川島夕峰

さいたま 秋谷風舎

枯野には枯野愛する鳥のゐて

ギブンネーム呼ぶ友増えし年の暮

出刃と鉄鍋手際の良さや冬の漁

海峡の飛沫を零す千鳥かな
枯芙蓉なほも留むる気品かな

鉄旅や宍道湖染むる冬夕焼

御降りや青く色づく庭の石

寒紅引く何処か出掛くる訳でなく

冬景色海鮮食はす店みつ

まだ見えぬ紫紺の襷箱根駅伝
父母の家今は更地に寒の雨
寒月や雪中行軍遭難記念像
凍蝶も慰霊の塔も雨の中
ダウン症の幼児愛し冬日向

さいたま 元田亮一

群れ鴉吸ひ込まれゆく冬夕焼
冬夕焼心のままに生きし今
独り宴奥山に張る冬テント
流木に止る千鳥や海暮るる
北国の闇をまとひて鶴眠る

さいたま 前田夏野

山茶花や算盤塾へ至る径

阿部貞代

古民家の手入れなき庭冬ざるる

東京 畑宮栄子

山茶花や山門の屋根葺き終ふる

初雪の一片肩に吾子帰る

初雪や湖面に消ゆる冬の精

白杖のこつこつひびく聖夜かな

若狭 山崎郁子

軒先の干し柿のれん冬陽受く

さいたま 播磨 進

峡空に稜線の濃く初景色

荒鋤のままのたんぼや初景色

初鏡銀灰色の髮光る

肩越しに夫の頬笑み初鏡

門松を据ゑて八代続く菓舗

さいたま 香田裕誌

中火から弱火に落とし一人鍋

喘息に背を摩る母外は雪

歩道橋遠き初富士拝む列

咳込みてまた身構ふる次の咳

たわわなる蜜柑と星夜の饗宴

門真宏治

車座の村の寄合酌む熱燗

丸出しの訛の絆牡丹鍋

御披露目の樽の紋様新走り

新米に尽きる至福の塩むすび

孫の居て娘この居る余生去年今年

枯芙蓉活けて茶室の凜とせり

老いてなほ存在感の枯芙蓉

単線の踏切の先冬景色

案山子さんもう卒業ね冬景色

着メロのジングルベルよ夜空冴ゆ

初富士やコンビニの上跨がれり
そここに小さく集ひて初詣
太箸の折り目正しき白さかな
つま先のタイツ余らせ年賀の子
空の重洗ひ浄めて四日かな

さいたま 清山尚己

年の瀬や母に着せたる白装束
母亡くし空白の空枯芙蓉
抱き寄する遺影写真や年忘れ
母亡くも生き方変へず冬景色
母亡くし孝行の時過ぎ去りぬ

さいたま 平野 楽

闇に浮く白川郷や冬景色
ガス灯の街仄めくや冬景色
老いてなほ忘れぬ笑みや枯芙蓉
果つるまで一生晒す枯芙蓉
着物を売れば二束三文十二月

木谷葉子

冬木立被ひ浄めの宮太鼓
冬晴やメタセコイアが天を衝く
古曆佳き日を記す赤き丸
坊泊り大椀に盛る菜雑炊
法堂に響く鳴き籠冬ざるる

石黒由美子

濡れ床を鳩よ歩くな日向ぼこ
侵略の無き地球人日向ぼこ
宝くじ売り場の遠し日向ぼこ
陽当たらぬハートのオブジェ日向ぼこ
日向ぼこもこの服また来るか

吉川拓真

それぞれに冬の歩幅や沼の道
行く先も余生も知らぬ凍蝶と
切り株に冬の蝶来て日の射して
おでん鍋けふで三日め卓の上
おでん食べゆつくり我を取り戻す

川 口 新井のり子

神仏や仏間の聖樹光りをり
八十路の吾無縁のままの玉子酒
ツアーバス棚引く雲に初詣
初晴の富士の姿や裾野まで
初東風や乱れし髪に手櫛かな

武田重子

犬までも吐く息白し散歩道
白湯の出る自販機もあり小六月
冬日なり投げ銭数多池澄みて
冬の川石投げ競ふ元少年
御降のやがて雪へと変はりたる

木村小麦

冬の日の湖面に映えて平和の木
暮早し五勺で酔うて語り合ふ
おでん鍋ゆつくり煮えて賑はひぬ
散歩道一点白き冬の蝶
冬蝶に抜かれつ追ひつ逍遥す

川口加藤みち

切り口が邪気を吸ひこむ門の松
さざ波立つ五湖の早暁初景色
とりあへず眉毛だけ描く初鏡
目で問はれ目で応へたる初稽古
はらからが三人となり若菜の日

若狭松村笑風

のんびりと関東弁の初電話
花丸をつけ百均の初暦

大阪遠藤人美

冬の朝百の湯けむり別府旅
身を削り古墳を護る枯木立
年の暮力作揃ふ裂き織り展

さいたま森下美智枝

箔押しの包みの和菓子初句会
球根に冬日のぬくみ始業式
隣席はたぶんお見合ひ福寿草

具沢山の粕汁かこむ夕餉かな
電飾まとう表参道枯木立

積ん読を崩しました積む年の暮

さいたま横山礼子

冬枯れにハクビシンさへ立ち尽くす
静けさや枯木立行く平林寺

小川洋子

年の瀬や古き映画の愛煙家
日捲りをゆつくり破る年の果
夕波に即かず離れず浜千鳥
夜更しの千鳥も吾も旅の宿

枯木立鳥も木の葉も飛び去りぬ
鉄鍋の粕汁しかも白子入り
数へ日の徒歩の生活ゆるゆると

初夢を猿に喰はせてやをら起き
行商の荷に七草の春を買ふ

駒谷行雄

戦場の児等に一碗雑煮餅
里山はシュガーパウダー初日かな

若狭畠中風花

時はレール年は動輪去年今年
塚に花手向けし人あり開戦忌
息止めて寒夜の音をさがしけり

エキゾチックジャパンと唄ふ大晦日
正月の餅も御法度ホーム母
異国にも同じ空有り春月夜

指折りて春の七草名を憶ゆ

若狭 森下 風湖

初説経飛鳥大仏伏し目がち

さいたま 北山建治郎

春待つややりたきことの山ほどに

春待つや小さな息吹ここあそこ

春一番バーゲンちらし空を飛ぶ

界限を騒がしくして春一番

宿坊の見馴れし空や初茜

西川夕月

見上ぐれば寒満月が我照らす

東京 桐山遊童

お降りや本殿続く石畳

(昭代改め)

百年の戸口際立つ松飾り

カロリーはさておき何と餅旨さ

生花の傾く芯や六日かな

熱爛が体にしむる夜間ロケ

遠く聴く通り過ぎゆくキャロリング

東京 山中いちい

路地裏に三匹の猫年忘れ

さいたま 榎本道代

もしかしてあの青い箱クリスマス

冬日和名代うどんの藍暖簾

向月台の砂さらさらと冬日和

「冬日和母と娘の銀閣寺」

年忘れ「愛の讃歌」を夫の弦

響きわたる手締あちこち西の市

さいたま 北出久美子

梟の見張りの台を神木に

所沢 飯室夏江

握りたる子の手の温み西の市

隙間風ひとり古家に住まふ祖母

かみ合はぬ猫との会話隙間風

音もなくキャンドル揺らす隙間風

寒菊に見守られ行く登校班

寒菊の風をいなして古戦場

冬うらら古戦場にももぐら穴
棒読みの透きとほる声聖夜劇
サンタクロース座敷童も待ちをりぬ
ひととせのでき事抱へ暦果つ
冬晴や門太き大手門

さいたま 湯浅 和

年の瀬の幸おはやうの夫の声
喜寿県展夫の恢復去年今年
大国の元首蛮行去年今年
松の内吾が名詠み込み句の色紙
松七日チャイコフスキーに身をゆだね

宮代 関谷多美子

手袋を投げてマラソン駆け抜くる
白菜をラグビーボールのごと抱へ
白菜鍋顔赤くして友無口
手に包む益子の碗の玉子酒
野水仙香が転ぶなと論しけり

菅原靖子

富士山の全容見する初景色
淑気満つ庭を鎮むる小社
初日さす二度寝の夫の背白く
館山や初富士はるか海原に
パソコンの画面を浸す初明り

さいたま 鈴木藻好

冬至湯やほろり解くる胸の内
石頭ふやけてまろし柚子湯かな
子の小言「さうね」と返す冬うらら
おでん屋で学びし技は皿洗ひ
霜柱踏めばざくざく頬ゆるむ

伊藤美津子

初孫を抱きし朝の浜千鳥
冬シャツの軒を過ぐるや荒川線
庭滝の音枯園を潤しぬ
天井の籠の鳴き出す淑気かな
紫は亡き母の色帰り花

羽島秀子

大中小あれやこれやの達磨市
酉の市裸電球顔顔顔
息白し駅へ駆けゆくスーツの背
除夜の鐘しばの遠吠え共に聴き
炉開きの釜鳴る音に背すぢのび

三森恵子

日の出待つ伊勢の鳥居や淑気満つ
神在す杜の気配や淑気満つ
花正月女子会だとして赤ワイン
歌舞伎座のロビー晴れ着の女正月
社会に出る孫はきりりと春待てり

小山あつ子

深夜バス高層街に月冴ゆる
舞殿の干支午跳ぬる初詣
百歳を祝ふ鶴亀謡初
書初や姫手本の四代目
素話や語り語られ初笑

さいたま

稲野幸子

元日も働く人の多かりき
新聞のどさりと落つるお元日
成人式チマチヨゴリと振袖と
食積や夫の好物詰めてをり
弓始晴着の娘凜として

大阪

海老名ノルン

沢庵石の沈み加減や家の味
皺皺の沢庵漬や母思ふ

緒方みき子

さいたま

小田三茅

さつきまで橙色の尾根冬の夕
冬の暮昭和が巡るコンサート
煮こぼしてこんろを磨く冬の暮

同じ店違ふ顔ぶれ年忘れ
年忘れ幸先の良き九連休
あと五分香の力なり冬至風呂
翌朝は溜息ひとつ柚子湯かな
年末や歳時記拭きて心機一転

落柿舎の蓑を借りたき時雨かな

小野町子

東京

柳父はる

夕しぐれ時の鐘鳴る城下町
しぐるるや高速走る日本橋
しぐるるや橋の欄干麒麟像
小夜時雨黒塀続く神楽坂

年玉を嫁御につつみ日温し
湯気の中七種粥のみどりあり
独り身に彩り加ふ雑煮焼
何願ふしんがりにつき初詣
熊出没火種多しや去年今年

実一つを枝に残して冬景色

三浦真由美

和歌山

南條さわゑ

眠らざる獣うろつく冬景色
縁側の茶飲み話や枯芙蓉
冬夕焼坂を登れば鐘の音
柚子湯出づちよつと美人になつたやう

餌やればすぐに飛びつく初雀
今年こそ会おうと書きし年賀状
新年や生くる喜び再確認
新年や汽笛の音の透き通る
初夢や豪華客船プラチナ族

遠山に色なき色や初日の出
初笑ひ猫はくさめをして居りぬ
初鏡行きつ戻りつ和服かな
三婆の笑顔さらさら小正月
白梅の白きに風のやはらかき

さいたま 山下ユリ子

屠蘇汲むや超高齢の犬も居て
初詣六人分の鈴を振り
雑煮餅三つ所望の卒寿かな
手のゑくぼぼつちやり出る子福娘
初富士やアキレス腱が躍動す

和歌山 嶋田洋子

足跡の砂に埋もれし夕千鳥
清水寺「熊」の一字や年の暮
見比べてチラシに丸を年の暮
買ひ忘れメモ書き忘れ年の暮
忘年会選外なれど酒の宴
生垣の下に一輪紅山茶花
汽車の窓から遠山のぞみ冬の旅
青空に紅梅咲けり眼にしみて
夜ふけてかすかにきこゆる除夜の鐘
行先もわからずとび乗る冬の駅

東京 大島千恵

さいたま 樋口元美

淑氣満つ天守から見る町並を
門かぶり赤松の樹皮淑氣充つ
松風の音聴く茶席淑氣かな
七福なます家族笑顔の小正月
小正月ユーチューブで聴く「桜貝」

さいたま 田口文子

着ぶくれて吾が身思ひのままならず
熱爛や父の目くばせ母スルー
目配りと気くばり幹事忘年会
除夜の鐘涙腺ゆるむ祖母とゐて
初春やめでためだの世にしたし

東京 清水美千子

初鏡拭けど拭へぬ年の数
初鏡拭へぬ齡紅を引く

草加 持永喜夫

若水や縁起運びし神田川
古池や枯木も揺るる芭蕉庵

さいたま 石井直子

除染土を覆ふシートや冬景色
水盤の主役となりぬ枯芙蓉
冬田道重なる藁へ雨しとど
茶の花のひそと咲きけり長屋門

所沢 関根千恵

パスワードを思ひ出せぬ春の昼
ふるさとは父母のにほひが辛夷咲く
日輪の匂ひを畳む春日傘
陽炎や彼の世と此の世往き来する

餌を求む鴉の群れや冬耕の田
枇杷咲くや水道工事まだ続く
枯木立鴉の古巢あらはるる
早起きのストーブつけて夫癒ゆる

入浴剤あわあわあわと年越せり
はしやぎたる子ら柝打ちて「火の用心」
懐手に港の除夜の汽笛かな
海老芋を貰ふ京の言葉は水のごと

御年賀に熊除け鈴を付けた客
冬の駅手相ながめて一時間
「ただいま」と帰る家あり雪の夜
誕生日親子で見上ぐる冬の月

白炭や利久目覚むる五徳の湯
樗炭一俵肩に担ぐ嫁
玄関に破魔矢と並ぶ御縁玉
立ち上がるドガの踊り子シクラメン

ふるふきが沢山出来たよ大土鍋
肩で風切る君だけど今夜柚子湯かな
ふるふきや西京味噌を君の為

鬼石 榊原聰子

横浜 石井妙子

藤沢 小島喜代子

さいたま 糸井しるく

東京 中村まどか

特集 俳句をはじめたころ — 初心を忘れず
— はじめての句会、はじめての句集

巻頭作品10句

雨宮きぬよ・伊藤政美・坂本宮尾
本井 英・高野ムツオ・清水 伶
丹羽真一・小林貴子

俳壇

4月号

3月14日発売
定価1000円(税込)

巻頭エッセイ
久保純夫

八木 健 選 滑稽俳壇

俳壇賞次席特別作品20句……………松下カロ

四季巡詠33句「第V期」……………岩岡中正・辰巳奈優美

第一回 真砂女俳句大賞 結果発表

新連載 谷川俊太郎の俳句……………正津 勉

風の旋律……………岸原清行

セピア写真館……………飯野幸雄

編集室の風景……………松の花俳句会

二度目の俳句入門……………長谷川 權

今月の句……………ひまわり俳句会

俳句と随想12か月 波戸岡 旭・吉田千嘉子

本阿弥書店 〒101-0064 東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話03 (3294) 7068 振替00100-5-164430

作品鑑賞

山本鬼之介

冬の霧まぼろしのごと一里塚 霜多光代

一里塚とは、江戸時代に諸街道の両側に一里ごとに土を盛り、松や榎などの樹木を植えて里程の目標とした塚である。

明治以降に道路の拡張工事などの諸事情によって消滅したが、史跡として現存されているものもある。一般的には、「直径10^{メートル}高さ2〜3^{メートル}の土盛り」と説明があるように結構大きなものであったようだ。

冬の夜、低く立ちこめた霧の中を歩いていたら、突然視界を遮るものが現れた。びっくりして思考を巡らし、それが以前話に聞いていた一里塚ではなかるうかとの思いに到った。

ト口箱の氷一閃 鱒の青 皆川更穂

トロール網を曳きながら航行して魚類を捕獲するトロール船の獲物を入れる箱が語源となった「ト口箱」である。漁港で陸揚げされた大身の鱒が魚市場に搬入され、手早くト口箱に納められて大粒の氷塊が投げ込まれる。屋外であれば朝日

が、屋内であれば皓皓とした蛍光灯の光を浴びた取れ立ての寒鱒である。「一閃」と「青」が、ト口箱から飛び出して今にも大海へ泳ぎ出しそうな鱒の新鮮さと躍動感を見事に表現している。刺身で、塩焼きで、そして、鍋で食い尽くしたい近海の鱒である。

目覚むれば星の囁く霜夜かな 反町 修

深夜小用に立って空を仰ぐと、数知れぬ星が瞬いていた。地には音が聞こえるほどの霜が降りているようだ。寒さを忘れて自然と対峙している作者である。「星の囁き」が佳い。

鱒酒や海峽越しに門司の街 倉田星歩

下関の料亭の二階から関門海峽越しに北九州市の門司の夜景を眺めている。卓上には本場の河豚料理が並び、頃は佳しと鱒酒が出てその香りに思いを馳せている作者である。海の向こうの街明りが作者の心を刺激し、思わずその昔歌い慣れた懐メロ艶歌の一節を口遊んでいた。

ぼつねんと丸いポストが冬の月 飯田忠男

昔懐かしい円筒形のポストである。ごく偶に見掛けることがあるが、投函した手紙がどうなるのか心配になる。作者も同じ思いで寒月に照らし出された丸いポストを見詰めている

のであろう。近付いてよくよく見れば、郵便物の引取時間が表示されているから心配ない。

縦と松並ぶ店先十二月 寺町知子

クリスマスは西洋、正月は日本の行事で、その各々を縦と松が象徴している。店先にその両方が並んでいるのはまさに十二月の景色で味わい深い。昔のように門松を立てる家が殆ど無くなった現今であるが、果してどちらが多く売れたか興味がわく。

冬の月自分と対話する無音 綿引まりこ

冬の夜、戸外で月を仰ぎ見ている作者の姿がある。自分の思いや悩みを心の中で月に語りかけている。じつと月を眺めていると、自分の問いかけに応えてくれるような気がしてくる。無音の対話なのである。中七から下五への句またがりのリズムが実に佳い。

穏やかに夫黄落をみつめをり 本橋稀香

昨年大晦日に、ご主人と永訣された作者の心の籠もった俳句である。十月末に入院されたご主人が退院された後、亡くなられるまで自宅療養されていたが、その間の一齣を詠まれた俳句であらう。永年連れ添った夫への温かな労りの心情がしつとりと表現されている。

終バスを降りひとり占め冬の月 田中弘子

出先での用事が長引き、帰宅が遅くなったが、何とか終バスに間に合った。最寄りの停留所で降りて空を見上げると、真ん丸月が出ていて、自分を迎えに出てくれたような気がして嬉しくなった。「そうだ今日は十五夜だった」と気づき、足取り軽く我が家へ向かった。

冬ざれや貝塚眠る町外れ 阿部幸代

貝塚は、主に縄文時代の人の生活を知る上で貴重な遺跡であるが、もしも自分の住む町の中に貝塚があったとすると、大昔はこの辺一帯が海であったことが判り、ちよつと複雑な気持になるだろう。その頃の衣食住の様子を想像して今の自分を其処にタイムスリップさせると、実に滑稽な姿が浮かんでくる。作者は、如何なる思いでこの句を書いたのであろう。

大絵馬の馬蹄の響き初詣 丸屋詠子

神社の神楽殿に置かれている今年の干支の馬を描いた巨大な絵馬である。その絵馬をじつと観ていると、一瞬その馬が蹄の音を響かせて絵馬から飛び出してくるような気がしたのであろう。現実に戻り、敬虔な祈りを捧げて宮を後にした。

大陸はもともと一つ冬至風呂 石関六弦

これまでに、テレビの学術番組で地球の成立ちについて何度か視聴したことがあるが、なかなか興味深い内容で、先月も、今の琵琶湖が出来上がるまでの過程を観て驚いたばかりである。

冬至風呂に浸かって物思いに耽っている作者であるが、浮かべた数個の柚子が、てんでにくっついていたり離れたたりしている。それを見ていて地球の成因に思いが到ったのであろう。気の遠くなるような年月の間に、幾つかの大陸がくっついて離れたりを繰り返して今の姿になったのであろうが、その形は冬至風呂の柚子の姿と似ている。

みちのくの背骨は太し雪下し 森下山菜

「みちのくの背骨」は、たいへん大胆な表現であるが、何回か読んでゆくと、作者の言わんとすることが解ってくる。それは、「雪下し」の季語が示すみちのくで暮らす人々の雪下ろし作業には、強靱な背骨即ち体幹が欠かせないということであるが、更に範囲を広げれば、雪深い土地で暮らす人々の強靱な心にも通じる。即ち、みちのくびとの心身の強靱さを「雪下し」に託したものと解釈した。

禪を締めてかかるや初衣裳 小林京子

新年の季語「春着」の傍題として「初衣裳」があり、それを使った例句として「梢は常なり人に花さく初衣裳 西鶴」や「梅すねて句せかせん初衣裳 初遊軒」が見つかったが近年の例句は無く、その点で掲句はなかなか貴重な俳句ではないかと思う。

さて、上五の措辞から判断して、初衣裳の人物が女性なのか、それとも、男性なのかという疑問が生じる。後者とすれば、紋付・羽織・袴で正月の正装を整える生粋の江戸っ子を連想するのでびったりである。しかし、作者の思考回路を想像すれば、やはり初衣裳の対象は女性であるという結論に達した。「えいやっ！」と気合を入れて自ら分厚い帯を締めている「八金」^{はちごもん}＝作者を思い描ける傑作である。

初雪の微かな重み傘の上 岡田宣子

歩行に支障を来すような大雪は御免被りたいが、小雪くらいならたまにはいいかなと思う。雪国の方々には申し訳ない言い方ではあるが。初雪が降ると、逢いたい人に会えたような気分になる。作者は、雨の時とは違った感触を抱いている。そして、それが今年初めての雪だと察したのである。微妙な感覚だと思うが、越後の豪雪の地で生まれ育った作者の研ぎ澄まされた感覚によるものではないかと察する。

冬蝶よ力尽くまで野に遊べ 菅原真理

最後の力を振り絞って飛ぶ冬蝶に出会うと感動し、「頑張り」と思わず激励したくなる。人里離れた野に辿り着いた冬蝶であろうか。元氣いっぱい飛ぶ姿を夢見つつ……。

鱸酒の焰白木のカウンター 杉浦千祐

近年出会う機会が少なくなった白木のカウンターである。小粋な女将がきびきびと立ち働く小料理屋を思い描く一句である。小皿に広げた数枚の河豚刺と仕上げの鱸酒である。頃はよしと、女将がマッチの火を近づけると小さな青火が。感激の一瞬である。

枕辺の小さき長靴クリスマス 川島夕峰

キャンディーとチョコレートが数個づつ入っているような可愛らしい長靴が、熟眠中の子の枕辺に吊るしてある。その子には、夢の中で抱えきれないほどの大きな長靴になっているのであろう。

屋根洗ふ職人一人小春空 宍戸洋子

家の外装の改修工事に従事している職人の一人かと思う。この家が日本家屋なのか洋式の家屋なのかは不明だが、経年の塵や埃を取り除き洗浄する仕事である。一人で気楽だろうが孤独である。晴れ渡った秋空の下で、ラジオを聴きながら黙々と作業する姿が作者の目に焼き付いたのである。

空堀の底の倒木冬ざるる 室井早都子

何処かの城址に遺っている空堀であろう。草が生え朽ち折れた倒木が横たわっている。昔を思い浮かべる作者の目に、往時の城郭と其処で立ち働く武士の姿が朧げに甦ってくる。

臘梅の辺りを制す凄まじく 岡本祥子

梅はバラ科の落葉高木であるのに対し、臘梅はロウバイ科の落葉低木と分類されている。花期も梅の早春に対し、臘梅は冬であり、どちらも香気を放つ花であるがその質が異なる。黄色く蠟細工のような花が発する香りは梅の花の香気とは違う。おそらく臘梅の木が数本あり、一斉に花を咲かせていたのであろう。その香りの強烈さが「凄まじく」に込められている。

御降りや青く色づく庭の石 秋谷風舎

「御降り」は、元日から正月三日の間に降る雨または雪をいう季語であるが、やはり正月は好天であってほしいものだ。辞書によれば、青石は庭石にする緑色の石で、秩父・紀州・伊予の青石が特に名高いと記されている。普段は目立たぬ石であるが、雨に濡れてその色を濃くしている。リビングから庭を眺めると、その青石が自分を差し招いているように思えたのであろう。新年を迎えた心の高揚感が現れた俳句であると思う。

水琴窟

(水明集二月号鑑賞)

池田雅夫

秋時雨傘は要らぬと去りし友

門真宏治

冬霧や生涯暮らす峡の里

西川夕月

『春雨じゃ、濡れて行こう』は、行友李風原作の戯曲「月形半平太」の一場面の名せりふである。艶やかな「春雨」に對し、掲句は晩秋の趣が深い「秋時雨」に着目している。中七からの「傘は要らぬと去りし友」の気性を詮索させる技法にまんまと嵌まってしまった。ニヒルな生き方に憧れる。

新米の香りの高し宿の飯

畑宮栄子

七五三蝶ネクタイですまし顔

海老名ルン

「新米の香りの高し」と、詠みたいことをはっきり表している。一歩進めて、では、どうして香りが高いのかを問えば、「炊きたて」だからと答えるであろう。新米の香りなので「飯」がなくても解るので、たとえば「炊きたての新米の香や出湯宿」などとすることもできる。お替り自由は必定。

街頭の優しさ沁むる愛の羽根

川島夕峰

草紅葉ぬれて季節の急ぎ足

室井早都子

「愛の羽根」は「赤い羽根」のこと。十月は赤い羽根の月間で、社会福祉活動として「街頭」で募金を呼びかける。赤い羽根を胸につけたサラリーマンや学生、生徒の爽やかな笑顔の光景が目につかぶ。その立場を明確にはいひかがか。

「七五三の祝い」に「蝶ネクタイ」で正装している男の子。少しはにかみながら親といっしょに参拝している。その「すまし顔」にいじらしさが窺える。「蝶ネクタイで」に注目し、他の言い回しがないかと工夫したい。「で」の助詞を、に・は・の・と順に入れ換えてみて、適うものを探してみたい。

秋も深まってくると寒暖の差が大きくなり、野や山の木々が色づくとともに、草々も色づく。わずかに黄ばんだ雑草が足元で可憐に染まっている美しい姿を、しみじみと眺めている。雨に濡れ、露に濡れ、冬へと向かう移ろいが感慨深い。

着くづれを菊師にまかす姫なりき

湯浅 和

昔の物語や歌舞伎など、また、大河ドラマの主人公、姫などを題材にして菊人形を仕立てる。数日の展示に花が萎れ傷む「着くず(づ)れ」をおこす。菊師は毎日観察し修復を施す。「菊師にまかす姫なりき」が本物の姫のように思わせる。

待ち伏せの枯葉くるくる帰り道

北山建治郎

発想、観点が独創的で惹きつけられる。枯れたまま枝に残っている葉。それが「くるくる」と舞いながら散る光景に出会ったのだ。あたかも帰ってくる我を「待ち伏せ」ていたかのように。「来る来る」と読み替えてみるとより楽しめる。

奥山の落葉の名残りはらはらと

小山あつ子

「落葉の名残り」は、すなわち「枯葉」であろう。枯葉もやがては落葉となって散ってゆく。「奥山の」の場面設定で、ものさびしさが浮き立ち、静かに散る葉や樹を「はらはら」と心配しているとも解釈できる。「名残り」の解釈に戸惑う。

推敲を迷ひ問ふ度山笑ふ

関根千恵

推敲に苦しむ己の姿を詠んでいる。なかなか納得のいかない苛立ちを「山笑ふ」に込めているが、「迷ひ問ふ」にも異和感がある。「見えぬ糸口」などとしてつなげる工夫を。

豊年や力士受賞の米一トン

小田三茅

米不足の問題は社会情勢に影響を及ぼした。大量に消費する大相撲。優勝の副賞として米俵が贈られる。それが「米一トン」である。昨今の相撲は世代交代による有望力士がたくさん台頭してきた。力士には存分に食してもらいたい。

柿たわわ熊のうはさは五キロ先

榊原聰子

昨年は「熊出没」の話題で日本中が震撼させられた。各地に出没した熊による犠牲者も少なくない。山間部のどんぐりや樺の実が不作で、民家の近くの「柿」を目当に來たらしい。「熊のうわ(は)さは五キロ先」は他人事でなく切実だ。

深煎の珈琲の香秋思かな

田口文子

秋はもの寂しさ、憐れさを感じやすい。そんな心持ちを、「秋思」という。普段は気にもしないことも、ふと不思議になったり虚しさを感じることがある。愛飲している「深煎の珈琲の香」にも、深まりゆく秋の侘しさを感じているのだ。

初萩の放つ白さよ音も無く

中村まどか

萩を代表する萩の花。秋の七草として知られている。可憐な萩に中でも「白萩」は清楚で品がある。「初萩の放つ白さよ」とした観点がいい。語順を変えるなど工夫をすすめる。

網野月を選

山紫集

若水の湯気も清らに出しを引く

梅澤佐江

若水や夫に供ふる茶を熱く

本橋稀香

若水やものぐさ王を決め込んで

青木鶴城

若水や鳳凰の発つ始まりが

吉川拓真

若水を仏前に置き手を合はす

——以上特選

若水や昂る気魄に満ちる今朝

畑宮栄子

若水やまろき玉露の一雫

原田自然

若水や心の中の色を消し

原田秀子

若水や客間の人は京言葉

樋口元美

若水や亡き母の分まで掬ふ

日高道を

若水や親元離る球児かな

檜鼻ことは

両の手を若水重くすべり落つ

平野 楽

いの一 番臨月の子に若水を

森 和子

若人の音立てて汲む井華水

遠藤人美

若水を老いし癖毛に与へけり

秋谷風舎

若水や清正井溢れゆく

寺町知子

若井汲む親元離る球児かな

畠中風花

両の手を若水重くすべり落つ

石川理恵

若水に願ひ新たに常備薬	福田千春	若水やとぎ汁透ける指の赤	持永喜夫
若水に浸す小豆や唾汁	保坂翔太	若水で割る一杯の蒸留酒	元田亮一
若水やきりりと沁むる指の芯	前田夏野	そろそろ零時若水汲んでチェイサーに	森下山菜
若水や手押しポンプの遺る家	曲淵徹雄	蛇口から若水汲みて神棚へ	森下美智枝
若水や仏花ごくごく喉鳴らし	正木萬蝶	若水や五臓六腑に沁みわたり	山岸久美子
若水や珈琲の香の仄仄と	松宮保人	亡き妻と若水くみて伊勢路行く	山下ユリ子
産土より知らぬ夫なり若井汲む	松村笑風	富士山を望み若水戴けり	山戸美子
若水や心新たに命生く	丸屋詠子	若水に柄杓の音も高く澄み	山中いちい
酒蔵に奉ぐ若水老杜氏	丸山マスミ	若水に生まれ変りて生きて行く	湯浅 和
若水を和らぎ水に朝餉かな	皆川更穂	百年の井戸より汲みし若井かな	横山君夫
若水にぴりつと締まる我が身かな	宮崎チアキ	若水の墨あざやかに匂ひけり	横山礼子
若水やガーゼで拭ふ稚の頬	室井早都子	水明の目指す百年若水を	綿引まりこ

若水や看板しるき助産院	阿部幸代	若水で洗ふ顔顔みな真つ赤	梅澤輝翠
若水や奈良墨の香が立ち上がる	荒井俱子	白山に深深と辞儀若井汲む	大場順子
若水を笛吹ケトルで沸かす母	新井のり子	若水を汲む人並ぶ馴染顔	岡田宣子
若水を蓬萊山へ汲みに行く	飯田忠男	若水を写経の墨に使ひたし	川島夕峰
若水の南無一杓を茜雲	池田珪子	手を合せ一番水は神棚へ	北山建治郎
若水の珠玉の雫七光り	池田雅夫	汲む井戸の湯気立つ朝の若水や	倉田星歩
若水や何かの列の最後尾	石関六弦	若水や心に幣を水道水	河野はるみ
若水汲む茶の湯たしなむ留学生	石田慶子	若水の光を編みて両の手へ	小林京子
大王松若水に活く末広葉	糸井しるく	若水を汲むやまたたく星の下	小山あつ子
若水を汲みて卒寿の賀を祝ふ	井上玲子	若水や生家に遺る掘抜井戸	近藤徹平
若水に貫ひ笑ひや子等の所作	上戸千津子	若水や家紋の器で進ぜたり	榊原聰子
地球号健やかであれ若水汲む	内田恵子	若水や富士の名水渾渾と	笹本啓子

水がめへほとばしり出る一番水

穴戸洋子

初水や朝日に映ゆる筒井筒

染谷風子

若水を掬ふ掌生命線

渋谷きいち

東雲や大師教示の若井汲む

反町 修

若水や清き一年願ふなり

嶋田洋子

若水や夫は四時起き頼りとす

高橋満耶子

若水の白湯に目醒めり服薬す

清水桂子

若水や手向ける夫へ語り掛く

武田重子

早暁の水屋整ふ若水桶

下川光子

年寄に若水の冷え身に染みて

田中章嘉

若水を汲みてふふみぬ旅の宿

霜多光代

辰砂の盃供ふ若水煌めけり

田中弘子

若水や赤児むさぼる哺乳瓶

菅原卓郎

若水の給水塔よりどどと落つ

寺内洋子

若水で淹るる朝茶の馥郁と

菅原真理

若水や嫁に譲りぬ台所

飛永 鼓

夜明けの清閑若水となす水道水

杉浦千祐

若水汲む参賀の人や延々と

南條さわゑ

若水や鞠愁ゆかしく塗椀に

鈴木玲子

ごぼごぼと湧く若水甘し富士裾野

西幅公子

若水や先づ義父からの一捻り

鈴木藻好

若水や厨にことり朝の音

野口和子

若水や緑豊けき星に生れ

関谷多美子

若水を汲んで茶釜に茶をたてる

野村美子

山紫集作品評

網野月を

いの一 番臨月の子に若水を

森 和子

母の子に対する慈愛の横溢した句である。「臨月の子」にも、またそのお腹の児にも、「若水」の靈験を確信してのことである。子の安産と健康な子の生まれることを願っての祈祷の意味合いが込められている。御身内か、もしくは身近の方の、実際のことであつたように思われる。「事實は眞実の敵」ということがあるが、事實が眞実を導き出した句である。

若人の音立てて汲む井華水

遠藤 人美

本来は厳かに「汲む」はずの「井華水」なのであるが、この「若人」は「音立てて」いるのである。そう言いながら、作者は否定的には思っていないのである。厳かには逆行するものの、「若人」の何とも清々しい程の澁刺さに目を細めているのである。切れの無い一句仕立てにして「井華水」の勢いを描出している。

若水を老いし癖毛に与へけり

秋谷 風舎

「若」と「老」の対比が肝である。筆者にしてみれば、どのようにして「癖毛に与へ」たのか気になるところだが、句中にヒントはない。作者にとつては、つまりどのよう「与へ」たかは要らないのである。作者は、「癖毛に与へ」たことだけ句の柱として据えようとしているのである。とすると、「癖毛」は何かのメタファーでもあろうか。作者自身が長年矯めてきた癖毛、つまりは性向と解釈すればは深読みし過ぎであらうか。

若水や清正井溢れゆく

寺町 知子

「清正井（きよまさのいど）」は加藤清正が掘ったと伝えられる明治神宮内の御苑内にあるそれであろう。菖蒲田の見事さが印象的な御苑である。「清正井」は四季を通じて水量の豊富なことでも知られているようで、座五の「溢れゆく」が射的措辞なのである。作者は初詣の際にでもこの「清正井」へも詣であたのであるか。都内有数のパワースポットとしても知られているからである。御苑の奥まった木陰にその井はあり、不思議なほどに「溢れゆく」のである。上五の切れ字「……や」の感嘆の意味を汲取りたいと思う。

若井汲み親元離る球児かな

畠中 風花

この球児は、全寮制の寄宿舎にでも入舎しているのであろうか。今年の若水を汲み終えて、「親元離る」のであつて、

正月だけの帰省という意味に鑑賞した。「実家離るる」のようにして中七と座五を繋げて一句仕立てにしても良いかも知れないが、中七の後に動詞の終止形による切れを作る微妙なリズム感は作者独特なものである。

両の手を若水重くすべり落つ 石川 理恵

中七の「重く」と「すべり」をどのように解釈するかで、句の内容が劇的に変わる句である。「すべり」は「若水」を掬い上げた「両の手」を僅かに開いて「若水」を逃がしたということである。とすれば「重く」は「若水」の重量感ではなくて、落ちてゆく速度感ではないだろうか。作者は、「若水」への愛惜から少しづつ、少しづつ逃がしたのである。「落つ」の措辞に対して「すべり」を加えて、また「重く」の描写を用いることで、景だけでなく心象的な表現にも至る奥深さを描出することに成功した。

若水の湯気も清らに出しを引く 梅澤 佐江

若水を用いてお雑煮をこしらえているのだろう、と想像した。「湯気」は視覚的な認知だけでなく、嗅覚的な知覚もあるのだろう。中七の「清らに」が前後を繋げる役目を果たしているのである。「清らに」は副詞的用法として座五の「出しを引く」を導き出している一方で、上五からの「若水の湯気」の修飾語としても活躍している。つまり「若水の湯気も清らに」と読めるのであって、加えて「清らに出しを引く」とも読めるということである。巧みな技法である。

若水や夫に供ふる茶を熱く 本橋 稀香

上五を切れ字「……や」にしているので、上五と中七座五は転換しているのであるが、「若水」を用いて「夫に供ふる茶を」を淹れたのである。座五の「茶を熱く」ということは、故人は熱い茶を好まれたのであろう。

若水やものぐさ王を決め込んで 青木 鶴城

正月に「ものぐさ王」になっている作者を想像した。座五の「決め込んで」は開き直りともとれるのであるが、「ものぐさ王」を許している周囲の寛大さを実は感謝しているとも推察される。上五の季語は時空間の設定という意味合いであろうか。俳句の常套から「決め込んで」いる主語は作者などあるが、もしかしたら作者ご自身が見守っている周囲の側であって、第三者が「ものぐさ王」になっているのかも知れない。

若水や鳳凰の発つ始まりが 吉川 拓真

何とも目出度い句意である。「鳳凰」は天下泰平の世の中に出現する瑞鳥で、むろん想像上の霊鳥である。吉兆をもたらすとされているのであって、「若水」つまり新年を迎えるにあたって、作者の祈りのようなものすら感じる。鳳は雄、凰は雌という解釈も成立していて、仲好いカップルの誕生とも解せるであろうか。

俳誌望見 梅澤輝翠

「秋麗」

令和八年一月号 通卷一八四号

主宰 藤田 直子 発行所 川崎市多摩区

中村草田男から鍵和田柚子へと受け継がれてきた俳句の詩精神を継承し、さらに多くの人たちと分かち合うために「秋麗」は、二〇〇九年十月に創刊され、二〇一一年十月から月刊となり、二〇二四年十月で十五周年を迎えました。

主宰詠 十二句より五句

道灌山五句より二句

子規虚子の下駄音ありし落葉道

木守柿子規はその後のこと知らず

柿好きの子規の句「柿くふや道灌山の婆が茶屋」その茶屋だったでしょうか、子規が虚子を誘った「道灌山事件」が思っておこされます。

乾き物水にもどして年の果

ありつたけの鍋を床にも年用意

正月用意の乾き物、昆布、乾椎茸、乾瓢等々それぞれを水に戻す。そして一品ずつ味がうつらない様に別々の鍋で火にかけていく。だからありつたけの鍋が必要になってくる。

新しい年を迎える為の丁寧な年の暮です。

蘭玉や娘らの知る母の恋

娘らが知ってるんですから母の恋のお相手は父なんです。うか。家庭円満で日常的にそんな会話がされている。いや、しかし本当は父だけが知らない、娘らだけが知る母の恋なのかもしれません。どんな恋だったのでしょうか、ドキドキしてきます。

麗藻集より 直子抄出 三十三名 七句より二名

耨耕の一直線に田鳧鳴く 鈴木 伸一

懸け終へし大根に日が殺到す 篠田たけし

秋韻集より 直子抄出 五十一名 七句より二名

望郷の思ひ断ち切る冬の薔薇 伊藤美紀子

短日や古き切手を組み合はせ 星野猪久子

麗日集より 直子抄出 三十八名七句より二名

赤き実を小鳥零せり白秋忌 玉木 郁夫

夕闇の轆かれし葱を見えぬふり 河瀬 久美

秋麗集 直子選 五十五名六句より二名

旅人か夜の窓打つ朴落葉 伍賀 稚子

水匂ふ路地を抜けゆく酉の市 島貫 恵

十六周年記念筑波一泊吟行記 十月二十五日二十六日四十九名の参加。十ページにも及ぶ記事が掲載され読みごたえのあるものでした。ますますのご発展を祈念致します。

句集喝采

菅原卓郎

◆木津直人「遠い嶺」

ふらんす堂

著者略歴 1956年生まれ。1997年正津勉氏の句会に参加。2006年頃より俳句同人誌「にん」に参加。俳人協会会員。

タイトルの「遠い嶺」は山好きの作者が諸事情で次第に山から遠ざかってしまい只憧れだけが残ってしまった心境からのネーミングとの事。本書では直接山を詠んだ句は少ない。

それぞれに心臓を持つ春の星
若葉雨孤独のわかる猫なりし

秒針のやうにはじける目高かな
困り事あれば夏炬を焚いて待つ

第一句、春の星は少し霞んだ光を放っている。その輝きがまるで心臓の鼓動の様に感じ、春の訪れを天空の星の脈動で表現している。第三句、群れの目高が時折はじけた様な泳ぎをすることがある。理由は諸説あるらしいがその動きは正に秒針が跳ねる姿である。目高と秒針の取り合わせが見事。

紅葉 焚く幼心のまま老いて
稲架ならぶ命むらなく青空へ

岩淵水門とんぼが水を磨く昼
落葉鳴る鎌倉に風の道いくつ

第二句、今ではまるで見かけなくなつた稲架掛け。刈り取つた稲束を掛け並べ太陽の恵みを頂く。稲の命を天に預ける日本の何処にでも見られた原風景である。第四句、よく鎌倉七口と称される切通しのことであろうか。確かに風の道であろう。鎌倉への出入り口として整備され人と共に風も行き来する古道である。その節には落葉が駆け回る事であろう。

◆くるせ行雲「今生の一刻」

本阿弥書店

著者略歴 昭和十九年富山県生れ。平成十四年生国富山へ帰郷。平成二十四年「辛夷」初投稿。平成二十八年「辛夷」同人。平成二十九年俳人協会会員。

還暦前に郷里富山へUターンしてから俳句と出会い、これまでの作品を集めた第一句集。ジャンルに捕らわれない自由闊達な句が多く豊かな知識が裏打ちしているのである。

一突きに決めたる大事心太
寢息澄む妻あればこそ夜半の秋

もたれ来る稚児のぬくみや初しぐれ
寒月や影添ふ木々の深眠り

第一句、迷うことなく一気に突き出すのが心太の要点。物事もぐずぐずせずに決断が大事である。心太には深い意味も含蓄しているのである。第二句、寝そべって横を見ると妻が心地よく寝ている。秋の夜の静寂を邪魔しない妻の寢息。感謝しかないのである。季語が非常に効いている。

鞆鞆に眠る昭和の記憶かな
悪党の隠れるやも猪口置いて

けふの月妻の傍にも猪口置いて
打水や仕上げの的は己が影

第二句、「夏の草」と言えば兵どもを連想するがこは悪党である。夏の鬱蒼とした草叢は何かが潜んで居ても不思議ではない。夏草の勢いが感じられる。第四句、打水は夏の風物詩であり特に町場では日常風景である。初めから広範囲に水を撒くが最後は一気に桶ごとまき散らす。暑さから自分の影を消すように己が影を標的にするのである。すつきりした。

水明忌の記



青木鶴城

令和八年の「水明忌」が二月二十八日、さいたま共済会館に於いて開催されました。

関東では、二十五日に一〇八日ぶりの纏まった雨が記録されましたが、開催日はいつもの通り「水明晴れ」で、少し汗ばむほどの好天に恵まれ、兼題「春の川」と「当季雑詠」の二題の競詠に三十九名の参加者が集いました。

事業部の小林京子氏の司会で開会、第二代長谷川秋子、三代星野紗一、四代星野光二の三代の主宰に黙祷を捧げた後、山本主宰のご挨拶を頂き、披講へと移りました。

主宰選

三極(天・地・人)

天

春の川いつか流れに歩を合はず

和葉

地

蒼天の峽に一筆春の川

更穂

人

せせらぎの未だをさな声春の川

由紀子

超特選

選句

主宰は多選

副主宰は二〇句選

雪欄作家は十句選

一般は五句選

披講

日高 道を

菅原 卓郎

主宰詠

帯締むる音遙かより秋子の忌
春の川三段跳の構へふと

特選

パレットへ黄色こんもり春の川
諍ひの言の葉流す春の川

昇

月を

邦人

桂子

マスミ

道を

鶴城

六弦
桂子

月影は天女の舞ぞ春の川
 息澄めり門跡尼寺の白椿
 少年の望みふふむや春の川
 鮒つ子の躍る水面や春の川
 山峡に法螺の吹鳴春の川
 花嫁を乗せて耀ふ春の川
 パンダ舎に名残を探す余寒かな
 沈丁花数多の鈴を鳴らしけり
 隠沼にかそけき息吹春浅し
 邇上魚の命焔めく春の川
 磐座に当たり渦巻く春の川

普通選

「弓勢」をしのび朗吟如月忌
 女優めく秋子ふはりと春シヨール
 ほんやりと遙か稜線春の川
 背びれ出し鯉の乱舞や春の川
 やはやはと岸撫づる音春の川
 通学は自転車積みて春の川
 史跡沿ひ光流るる春の川
 村民の繰出や春の川浚へ
 児を乗せて父の銀輪春めけり
 飛石をゆるりと流る春の川

久美子 佐江 翔太 風子 卓郎 マスミ 道を 茂子 徹雄 佐江 修 徹平 茂子 栄子 輝翠 徹雄 京子 章子 宣子 真理 はるみ

春光や二人して得る金メダル
 梅東風や字余り多き紗一の句
 小魚を仕掛けて遊ぶ春の川
 春暁のひかり容れたり水明かり
 薄水や生簀の鯉の見え隠れ
 穏やかに一舟下る春の川
 砂底を蠢く命春の川
 じつくりと「置き配」へ這ふ春の雨
 早春の山野はどこか寡黙なり
 梢からのぞく花芽や如月忌
 春の川音聴きたしと入る林
 舟唄や水棹に分くる春の川
 春立つや都営地下鉄一日券
 秋子忌や川の枯れしもまた満つる
 春時雨巫女凜として仕へけり
 蜂眠る巢箱を包む朝日かな
 梅花藻の伸び伸び揺るる春の川
 観梅や爪皮赤き日和下駄
 田畑を光と戯る春の川
 春めくやひかり微笑むカフエテラス
 黒髪に託す命よ秋子の忌
 雨の日に雨を見てゐる秋子の忌
 遠投や吾子らの遊ぶ春の川
 宿痾てふ天命なくば秋子の忌

ひさの 延昭 美子 由紀子 修 義子 楽 六弦 久美子 章嘉 ひろこ 昇 更穂 拓真 和葉 直子 公子 卓郎 チアキ 翔太 風子 月を 邦人 鶴城

互選及び主宰選の披講の後、天・地・人の
 三極には主宰より色紙、超特選には短冊が授
 与され、互選による高得点者には水明より記
 念品が贈られました。
 高得点者
 一位 五明 昇
 二位 青木 鶴城
 三位 梅澤 佐江
 四位 網野 月を
 五位 丸山 マスミ
 六位 平野 楽
 七位 山岸 久美子
 八位 皆川 更穂
 表彰の後、主宰より講評を頂き予定の時刻
 通りに終了しました。今回は一名の初参加が
 あり、見事に主宰の超特選句に選ばれる快挙
 がありました。今後も初参加者がどんどん増
 えることで、水明の更なる活性化に繋がれば
 と願うところで。
 三極及び超特選、また、高得点を取られた
 皆様おめでとうございました。次は熊谷での
 春の吟行会です。お楽しみに。

立春や蛇腹のやうに猫のびて

喜 恵

弾初のチェロ温むる腕の中

知 子

捨てられぬ母の紵台針供養

——以上特選

北越の白砂の切れ寒鰯や

夏 野

春立つや月の裏側未だ知らぬ

翔 太

ジョンガラをいきなり奏で弾始

宣 子

待針の赤白緑針供養

延 昭

焼くもよし西海道に寒の鰯

はる み

衣縫ひし日日のはるかや針まつり

マスマ

若松例会（京橋）

石田慶子 報

春立つや魚も獣もうずうずす

由紀子 修

春兆す臨書の墨の香しき

マスマ

針供養やはき豆腐にそつと挿し

行 雄

高下駄の書生氣質や花の兄

京 子

女等に男も交じる針供養

光 子

下萌や狛犬の眼に惑ひ無し

詠 子

立春やプリズムとなるガラスビル

恵 子

寒の明け天金の書を書棚より

鶴 城

仕上がらぬ布は見ぬふり針供養

章 子

下萌ゆる朽ち始めたる切株に

千 春

春立つやざくざくと切るフランスパン

昇 文

落城の名残の土塁草青む

佐 江

立春や妻のバックに朱印帳

曆 文

下萌や標野に皇子の恋の跡

萬 蝶

第五例会（浦和）

河野はるみ 岡田宣子 報

弾初や内海をゆく日の光

夏 野

春シヨール書物の上にふはり置き

慶 子

漁火を蹴り立ち上がる寒鰯や

宣 子

下萌の吾が行く道を示しけり

京 子

彈初は春の海より音合はず

知 子

古文書の筆致流麗春日和

はる み

糶声に肌つや増す寒の鰯

知 子

下萌や獅子身中の虫までも

詠 子

寒鰯の照りの見事さ厨沸く

知 子

春日射す普段届かぬ書齋まで

星 歩

寒鰯や波の泡舞ふ日本海

千 祐

本棚に昭和歴史書黄砂來る

千 春

寒鰯の正油を弾く勢かな

千 祐

吹き曝し神田の書架に春の雪

千 祐

弾き初めの二階に希のピアノ鳴る

義 子

下萌や野外演劇暮れなづむ

星 歩

たどたどしバイエル楽し弾初

千 祐

春時雨筆流麗なお品書

千 祐

——以上特選

千 祐

下萌や昔耀歌に湧きし里

佐 江

——以上特選

千 祐

草萌や人馬気ままに都井岬

萬 蝶

関西例会（大阪）

森本早苗 報

料峭やためらひがちに笑ふ君

人 美

強東風や地面に踏ん張る鳩の群

満耶子

赤子はや這ひ這ひはじむ春隣

洋 子

風花の樂なしに舞ふひたすらに

和 子

節分や海苔巻少し誇らしげ

千津子

山茶花を一本残し地鎮祭

ノルン

鱒東風妣の味噌漬け今一度

早 苗

なつかしや寺に絵模様春火鉢

千津子

東風強く肌寄せ合ひし猿親子

きわゑ

釣具屋の魚拓を揺らす椿東風

和 子

春浅し爪に土くれ埋めしまま

人 美

東風吹くやカーナビ無視の二人連れ

千世子

老鳥の世話やくインコ余寒なほ

満耶子

東風吹かば天神さんの超多忙

洋 子

菜飯食ぶ田舎の彼の人思ひつつ

ノルン

椿東風一輪ほころびそめし庭

嶋田洋子

分けいりて山姥となる樹水林

千枝子

大寒波列鳥舌戦選挙戦

早 苗

昔話あれこれ55

丸山マスマミ

内大臣道隆

道隆公の臨終の言葉

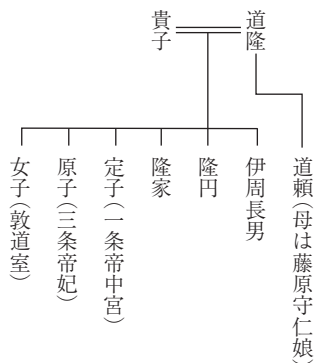
道隆公の酒好きの心は、臨終の際にも忘れなかったであろうか、お付きの人々がお極楽浄土の方に向かせて「お念仏をお唱えあそばせ」と勧めると、「「濟時や朝光なども、極楽に生まれかわっているのだろうな」と言ったのには心打たれる事だ。

道隆 長徳元年(995)四月十日薨去。四十三歳。
朝光 同 三月三十日薨去。四十五歳。
濟時 同 四月二十三日薨去。五十五歳。

道隆公の子孫

長男の道頼公は、母は藤原守仁の娘で祖父の兼家公の養子とし、六郎君と申した。容貌も素晴らしく、人柄も洒脱で魅力的な方だった。大納言にまで

昇進したが、疫病のため、長徳元年六月十一日に薨去。



道隆公の北の方

北の方は、高階貴子で、高階成忠の娘。貴子は、本格的な漢詩人で、清凉殿での帝の御前に置ける詩席で、漢詩を献上されたほど漢詩に秀でており、高内侍と呼ばれた。

*『大鏡』に記述はないが、彼女は優れた歌詠みでもあり、『新古今和歌集』に「儀同三司の母」の名で、次の歌が取り上げられている。

忘れじの行く末まではかたければ
今日を限りの命ともがな

(大意) 何時までも忘れないとおっしゃるその言葉が遠い将来までは頼みにし難いので、その御言葉のあった今日と言う日を最後とする私の命であってほしいものです。)

『小倉百人一首』にもあり。

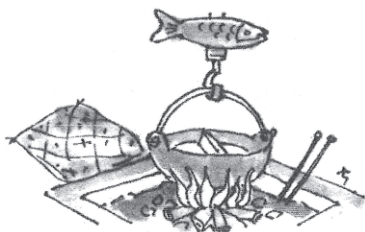
伊周公

道隆の貴子腹の長男伊周公は、道隆公の官位を遥かに追い越して二十一歳の時父道隆公の力で、内大臣に任ぜられた。道隆公は病が重くなった際、参内して「自分が病の間は伊周の内覧の宣旨を出されるよう」指図して出家した。

七日関白・道兼公

しかし、関白に任命されたのは、道隆公の弟道兼公であった。道兼公は長徳元年五月二日に関白に任命されたが、病のため五月八日に薨去。世に「七日関白」と言われた。

各地
句会



和歌山水明句会 (和歌山)

実千両供へ祖師堂明るうす
後手で受け取るバトン息白し
今朝の春切妻屋根の一軒家
初写真花に紛れる少女かな
四時起きの夫の役割一番水
新年や汽笛の音の透き通る

和子
道子
千枝子
千世子
満耶子
さわゑ

初富士やアキレス躡が躍動す
瑞鳥の現るるころほひ初山河

水明澤つくし句会 (大阪)

下町はカレーの匂ひ小正月
隣席は多分お見合福寿草
食積や夫の好物詰めてをり
句友年年増えてめでたき初句会

若鮎句会 (浦和)

師に淑気鍋焼鯉鮓の湯気の先
池を見る跛行の男冬の梅
青春の軌跡たどるや冬うらら
幾何学の雪吊そらを羽交ひじめ
初春や舞台の影に夢ひそむ

雪吊の網の震へやハープ弾く
万福や名代の店の大えび天
愛日や綺羅を留むる板ガラス
初春や古池しのぶ庵あり

越後の会 (浦和)

打ち寄する波と戯れ初日待つ
花びら餅太陽の朱を包みをり
数の子を噛んではらから皆達者
野水仙描く半島海光る

洋子
她代

智恵子

人美

ノルン

洋子

山菜

拓真

貴

ひとみ

真

秀子

芳春

月を

喜夫

宣子

真理

輝翠

翔太

若楠句会 (浦和)

惜別の上野の杜や冬景色
枯芙蓉なほも留むる気品かな
除染土を覆ふシートや冬景色
裁判所の長き廊下や冬景色
枯芙蓉湖面にゆるる立ち姿
カラカラと四季なき風に枯芙蓉
この路地に慣れし歳月枯芙蓉
闇に浮く白川郷や冬景色

新樹の会 (浦和)

縁側の茶飲み話や枯芙蓉
騒めきや先着順の暮の市
老いてなほ存在感の枯芙蓉

陸奥の飛白のもんべ春まぢか
寒潮や歌も途切るる竜飛崎
菩提寺や落ちても美しき寒椿
夕空を飛行機の腹日脚伸ぶ
人待ちの紅き鼻緒や寒椿

芙蓉句会 (浦和)

ほどほどといふ幸せや初みくじ
亡妻を偲ぶこの日の松飾
それぞれの干支に合はせて祝箸

久美子
風舎

直子

京子

文子

弘子

慶子

葉子

真由美

鶴城

宏治

風子

道を

修

徹雄

鶴城

美子

仁

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

芽吹句会 (浦和)

階下よりめでたき調べ琴始

雑煮汁揃うてすする音の善し

初夢や花の二十歳に戻りけり

新作はいつか古典に初芝居

寒夕焼け梵鐘わたる帰り道

遠き日の記憶呼び込み歌留多会

雪降り旧居の道の巾いかに

書初や太筆で書く左馬

めだか句会 (浦和)

山陰の訛「だんだん」寒蜷

みな揃ひかくかくしかじかおでん酒

まんなか鍋ふくらみて関東煮

野水仙親子地蔵に寄り添へり

空つ風猫には猫の訛あり

蒸饅頭お国訛りの温かさ

丸に角揃ひ踏みしたおでん食ぶ

少子化のニュースおでんの煮ゆる頃

おでん酒湯気の向かうの恋女房

三日目ぞ今宵も独りおでん鍋

主なき庭の水仙光よぶ

修

久美子

富子

弘子

玲子

チアキ

ひろこ

道

道

楽

恵美子

尚己

和子

美津子

妙子

道代

六弦

月を

はるみ

知子

若枝句会 (浦和)

樗や白寿の人に励まされ

初春や願ひにたわむいくじかけ

明の春去年の計を思ひ出し

樗やことほぎ告ぐる声聞こゆ

初春は命を刻み息ひとつ

櫛の会 (浦和)

淑氣満つ氷川の杜の黎明よ

花正月女子会だとして赤ワイン

神殿に家族の揃ふ淑氣かな

日々続く平和な暮らし小正月

ダイヤモンド富士目に焼き付けて淑氣満つ

馬拉ソンの櫛の力淑氣満つ

小梅の会 (浦和)

切り株に座りし小さき雪達磨

居酒屋の微かな灯り冬の暮

たわわなる蜜柑と星夜の饗宴

冬曇り故郷香る鱈鮓出汁

住所不定性別不詳浮寝鳥

貞代

美佐子

みどり

泰子

泰生

文子

あつ子

朋子

裕誌

富子

千重子

恵子

隆文

隆進

隆然

道

円卓の会 (浦和)

寒の雨畦道遠く人の影

初夢や不活化したる核兵器

年明けや生温き風頬を撫づ

風花にたましひ載せて遊びけり

凍蝶の悶え張り付く白き壁

ドキュメント72時間冬の虹

警報のながき遮断機寒の雨

凍蝶の日差しに二ミリ動きけり

寒の雨達郎口遊んでみても

凍蝶や偉い奴ほどぬくぬくと

たかなな俳句会 (川口)

包み込む孫の靴皺の手で

淑氣満つ三崎港へ大漁旗

境内に朝の箒目淑氣満つ

吾子負うて夫待つ橋に冬の月

晴れの日や輝の手の置きどころ

床の間の一期一会や淑氣満つ

京子

修

道

輝

拓

亮

卓

翔

月

鶴

城

鶴

城

た

み

小

麦

義

子

み

ち

の

り

子

鶴

城

水明熊谷句会 (熊谷)

冬の夜や生さる長旅継ぎ足して

寒き夜に一差舞ふや黒田節

冬の夜や受話器の奥にかぐや姫

水鳥にはかせてみたきトウシューズ

冬の夜や息子の遺影にらむ吾

阿吽の像の眼煌めく冬の夜

鉄瓶の細く湯気吹く寒夜かな

軽重を問はれ沈黙寒土用

水鳥の水遁の術使ひをり

闇に映ゆる夜の工場浮寝鳥

なごみの会 (浦和)

寒椿梢に透ける昼の月

かたはらに大籠を置き達磨市

寒椿映す羅漢の温顔に

村外れの共同墓地に寒椿

青葉の会 (浦和)

万両やたわなる実のたくましき

伝言のメモの癖字や寒に入る

冬の朝大音響の宣伝カー

実万両たつぶりの紅輝かせ
万両の赤で裾埋めお生花よ

万両や庭石見事御影石

万両に鳥の到来静やぶる

あちこちに鳥の届けし実万両

柿の木塾 (浦和)

河豚食うて公達偲ぶ壇ノ浦

知り尽くす我が好物を寒見舞

少年も河豚もすぐするふくれつ面

遠方より鯛とどくや寒見舞

杯に蒔絵浮ばせ食ぶる河豚

難しい事は書かずに寒見舞

水明鬼石句会 (鬼石)

幼子のスキップ足元実万両

穏やかに明けて過行く三日かな

寒の朝猫はさつそくひざの上

ミモザの会 (横浜)

せせらぎを子守唄とす猫柳

触れたれば心幼に猫柳

散歩道ゆれてまねいて猫柳

真理
美智枝
美子
洋子
輝翠

美子

洋子

輝翠

野菊の会 (与野)

昇

和葉

恵子

かつ子

節代

和子

蝌蚪の会 (浦和)

聰子

和子

ナオ子

美千子

詠子

亜弥子

たまゆらの朝のしるがね猫柳
猫柳思ひのままに生きてゆく
濡れてなほひかりを放つ猫柳
猫柳牛乳瓶に五本程

猫柳牛乳瓶に五本程

銀盤に映ゆる少女よ猫柳

天茸絨の手触りが好き猫柳

野菊の会 (与野)

計報とて光りまみれの春の雪

咲き初めし金魚椿のぼつてりと

裸木は骨太なりしもやしつ子

この円盤は正体不明たんぽぽ野

衆議院選挙の重し春の雪

蝌蚪の会 (浦和)

湧水を掬ひて五臓冴返る

キリキリと弓絞りをり冴返る

露天湯の渡り廊下や冴返る

本当のこと言へばいいのにシクラメン

ほんのりと甘さ漂ふ梅日和

春シヨール風に流るる甘き色

母の声また聞きたいよシクラメン

冴返るインターホンに顔と声

冴返る酒米足らぬ酒の蔵

萬蝶
栄子
史代
慶子
玲子
千春

史代

慶子

玲子

千春

美代子

和子

清子

恵子

光子

しるく

五郎

夏野

ひさの

元美

礼子

幸子

風舎

秀子

うさぎやの甘味を恋ひて梅社
看護師の詰所に紅のシクラメン

月を
宣子

首飾りは真珠と決めて入学式
白き梅真青な空に歌ふなり
春めきて半音高く四十雀
春めきて田は蠢動をはじめけり

美智枝
千恵
行雄

露の臺刻む至福の朝の粥
寒茜機運待ちある摩天楼
托鉢の僧のたもとに露の臺
強運は祖先のお陰寒椿

山菜
光代
珪子

雛の会 (浦和)

ところと煮込むポトフや春の雨
作業所に新人来たり桜餅

喜恵
輝翠

真宗の教へは優し春の雪
髭面の写真へ香れヒヤシンス

多美子
由紀子

卒業の演歌始まる二次会場
ふるさとの土の匂ひの露の臺

曆文
きいち
更穂

魔除けなる草鞋一丈下萌ゆる
作業着のロゴの大書や冴返る

燈女
桂子

伸びやかに摘み菜する影春めけり
春さざす街に出会ひし人の仁

公子
久美子

卒業の演歌始まる二次会場
ふるさとの土の匂ひの露の臺

更穂

手作りの赤飯もありバレンタイン
潤ひて地母神めざむ春の雨

はるみ
公子

春めくや新色ルージュ並ぶ店
春めくや新色ルージュ並ぶ店

幸代

野ばらの会 (浦和)

更穂

下萌を育む大地永久にあれ
草萌や人馬の憩ふ草千里

チアキ
佐江

補聴器に迷ふ二月や九十すぎ
二月の重たき風の忍び込む

千津子
早苗

首稽牧場の馬のよく跳ねて
口遊ぶ夜明けのスキヤット春の星

栄子
秀子
茂子

農道の深き轍や犬ふぐり
春寒や門前茶屋のだんご汁

延昭
由美子

洋行へ銅鑼の音一打寒明くる
銀鼠の雨に銀鼠猫柳

君夫

山伏の法螺貝遠く春の星
鶴川山百合句会 (鶴川)

夏江
みき子

旧道の静もる家並春寒し
水仙や引きこもる日の薄化粧

洋子
早都子

留守宅の猫に土産は猫柳
春疾風重機の叫ぶ最終章

順子
翔太

染色屋寒九の白布を翻へす
持て成しの珈琲寒九の水沸かず

史代
広子
千春

道化師の作り笑ひや春寒し
威を放つ往古の鎧冬館

俱子
昇

蔵町の舟の行く手に猫柳
春浅し今年の芽吹き未だ序章

徹雄
まりこ

朝まだき神馬に供ふ寒九の水
善哉を温めなほす寒九かな

萬蝶
理恵
美千子

櫻蔭句会 (浦和)

美子
真理

墨痕の薫る玉章春時雨
舟唄のいよよ佳境や猫柳

風子
卓郎

寒九の雨乞いてるてる坊主逆さにす

美千子

糊落とす手先かなはぬ寒九かな
半分こ寒九の掌缶コーヒー
友を待つ駅北口の寒九かな

うさぎ
まどか
玲子

黄水仙挿して独りの誕生日
独り身に煩惱少し雪時雨
春の夢側に形見の時時計
春炬燵うたたね破る正午かな
異国路の時差の戸惑ひ春夕べ
終末までの八十五秒冬の雷
ご城下に嘗て午砲や山笑ふ
独り居の声の小さき鬼やらひ
春寒し足踏んばつて独吟す

義子
桂子
美子
久美子
幸代
知子
卓郎
チアキ
かつ子

ふつふつと旅への思ひ春立ちぬ
寒明や墓石冷たき大龍寺
猫の毛の指に湿りや春しぐれ
歩む背に優しき光春立ちぬ
豆打や猫は内鬼之介も内
猫脚の長椅子に居り臙月
老いたれば鄙に遊ばむ揚雲雀

夕峰
寿夫
和子
伸子
月を
京子
風舎

りそな俳句会 (浦和)

初午や膳に欠かせぬきつね鮓
道真の絵馬連なりて春めきぬ

道を
久美子
建治郎

大八洲揺るるに任せ寝正月
寝正月退屈と言ふ疲れあり
寝正月畳で暮らす犬とをり
荒れる手の消えし二日目寝正月
写経の座首すぢ撫づる隙間風
隙間風座卓を囲む腰屏風
寝正月今記さねは忘るる句

昇
俱子
啓子
満智子
由美子
和子

玄関で父待つ姉妹クリスマス
凧が回す厨の換気扇
凧に吹かれて君を待つ駅舎
凧の中に子供の声ひかる
凧の夜のポターージュは稍濃いめ
凧や青い目をした移住僧
凧や伸びる打球のエネルギー
木枯や若狭蝶の裏表
静かなる古い相応しきクリスマス
児の寝顔そつと確かめクリスマス

ことは
郁子
友夏
自然
初花
風花
祥子
笑風
保人
夕月
風湖
和風
寛久

初午や気になる株佃乱高下

勲

きざきサークル (浦和)

若狭水明会 (若狭)

初午や屋敷稲荷に一升瓶
せせらぎの光燦々春めける

初花

梅見ゆくつぼみをそつと覗き見る

美江子

山 茶 花 (浦和)

春浅し網を繕ふ老漁師

春の夢に割り込む六つの鐘
カリヨンの響く広場や花ミモザ
臙月独り旅立つかくや姫
駅前絡線時計春さざす
春めくや発条緩む鳩時計

風花

俳句の手ほどき (岩槻)

マスマ

延昭

和子

シャパンの泡シユワとクリスマス
新札も財布に馴れてクリスマス
茶髪の子凧連れて帰り来る
冬の夜明日は検診寝返り打つ

風湖

春暁の夢に割り込む六つの鐘

延昭

和子

和子

シャパンの泡シユワとクリスマス
新札も財布に馴れてクリスマス
茶髪の子凧連れて帰り来る
冬の夜明日は検診寝返り打つ

風湖

カリヨンの響く広場や花ミモザ

佐江

和子

和子

シャパンの泡シユワとクリスマス
新札も財布に馴れてクリスマス
茶髪の子凧連れて帰り来る
冬の夜明日は検診寝返り打つ

風湖

臙月独り旅立つかくや姫

佐江

和子

和子

シャパンの泡シユワとクリスマス
新札も財布に馴れてクリスマス
茶髪の子凧連れて帰り来る
冬の夜明日は検診寝返り打つ

風湖

駅前絡線時計春さざす

延昭

和子

和子

シャパンの泡シユワとクリスマス
新札も財布に馴れてクリスマス
茶髪の子凧連れて帰り来る
冬の夜明日は検診寝返り打つ

風湖

春めくや発条緩む鳩時計

忠男

和子

和子

シャパンの泡シユワとクリスマス
新札も財布に馴れてクリスマス
茶髪の子凧連れて帰り来る
冬の夜明日は検診寝返り打つ

風湖

春めくや発条緩む鳩時計

翔太

和子

和子

シャパンの泡シユワとクリスマス
新札も財布に馴れてクリスマス
茶髪の子凧連れて帰り来る
冬の夜明日は検診寝返り打つ

風湖

今月の句 (三月)

「水明」俳句会

「水明」俳句会主宰……………山本鬼之介

三月の季語は仲春を主として動物、植物などは潤いのある季語が横溢している。「猫の恋」「囀り」の躍動感と「フリージア」「すみれ」の色合いである。また時候、天文の季語も瑞々しいものばかりである。「春めく」「春闌る」の芳醇な趣と「東風」「春三日月」の清新ぶりは春ならではである。そして「雪崩」「山笑ふ」には大地の温みを感じられ、生活の季語、行事の季語についても同様である。三月という時空間が、季語の世界観を浄化しているように思われてならないのである。

- | | |
|----------------------------|-------|
| 1日「春浅し」
春浅し父の遺した身分証 | 元田亮一 |
| 2日「送水会」
法螺の音に松明ゆれし春の溪 | 原田自然 |
| 3日「雛祭」
箱開くる老いときめき雛の宵 | 丸山マスマ |
| 4日「東風」
江の島の先に富士浮く東風の浜 | 岡田宣子 |
| 5日「啓蟄」
啓蟄の墓に伺ふ付かぬ事 | 石井喜恵 |
| 6日「亀鳴く」
亀鳴くや海の高さと同じ町 | 石関六弦 |
| 7日「赤黄男忌」
蝶落ちて時空融合赤黄男の忌 | 日高道を |
| 8日「ミモザ」
花ミモザふはり枝垂れて陽を抱く | 前田夏野 |
| 9日「雪崩」
カモシカの立ち尽くしをり溪雪崩 | 寺町知子 |
| 10日「三月十日」
東京の夜空尽くせり火花かな | 青木鶴城 |

11日「猫の恋」
 夜の帳むやみに満たす猫の恋
 香宗我部 真
 12日「修二会」
 痛みどめ効いて修二会の火の粉あぶ
 大橋 廸代
 13日「十三詣」
 山門をくぐる真顔や智恵詣
 保坂 翔太
 14日「囀り」
 囀や朝陽射し込む狭庭より
 平野 楽
 15日「卒業」
 将来へチツキを送る卒業子
 皆川 更穂
 16日「春めく」
 船洗ふ妻の前髪春めきて
 梅澤 輝翠
 17日「彼岸」
 香満ちてつい頭のさがる彼岸寺
 寺内 洋子
 18日「フリージア」
 床の間にフリージア活け笑ひじわ
 河野 はるみ
 19日「椿」
 門出の日結び髪きりり白椿
 菅原 真理
 20日「春三日月」
 影揺るる春三日月の観覧車
 菅原 卓郎
 21日「春分の日」
 父母降りてくる春分の日
 永野 史代

22日「山笑ふ」
 背伸びして校歌斉唱山笑ふ
 檜鼻 ことは
 23日「初桜(初花)」
 初桜小さき少年の力瘤
 内田 恵子
 24日「水温む」
 水温む雑巾がけの児童たち
 反町 修
 25日「蝌蚪」
 その中に級長も居る蝌蚪の群
 森本 早苗
 26日「誓子忌」
 誓子忌に思ひ馳せつつスマホ打つ
 吉川 拓真
 27日「日永」
 ひつそりと日永を愛づる大樹かな
 秋谷 風舎
 28日「鞆」
 鞆やなんと綺麗な妻の脚
 小林 京子
 29日「春闌る」
 伊豆大島の姿やはらか春闌る
 丸屋 詠子
 30日「すみれ」
 すみれ草下向きて聞く子の意見
 福田 千春
 31日「三月尽」
 私 定 年 退 職 三 月 尽
 網野 月を

令和8年水明全国大会のお知らせ

■全国大会・親睦会

[日 時] 令和8年6月28日（日曜日）

[会 場] さいたま共済会館

[行 事] ・水明賞・季音賞・かな女賞・新珠賞・鼓笛賞・山紫賞の表彰

・新誌友の紹介、新季音同人、新同人の発表

・大会兼題入選句の発表、表彰、講評等

・親睦会

※大会・親睦会のスケジュールおよび参加費等の詳細については5月号にて改めてご案内いたします。

水明俳句会 令和8年全国大会実行委員会

誤植訂正

二〇二六年二月号三五頁下段 慎んでお詫び致します。

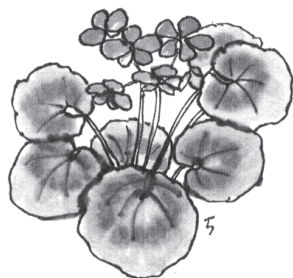
正 見切り発車の前途多難や秋時雨

誤 見切り発車の前途多難な秋時雨

二〇二六年二月号七三頁上段 慎んでお詫び致します。

正 初霜や野菜畑の薄化粧 修

誤 初霜や手を摩りつつ見遣る山 修



令和八年水明全国大会 兼題句募集

水明全国大会の兼題句を次のように募集します。ふるってご応募ください。

兼題 「春光」 春の色、春望、春景色

「堇」 すみれ、花堇、堇摘む、一夜草（スミレは不可）

「中」 詠込み（春の季語で詠む）
※右の傍題以外は不可とします。

句数 通じて二句（一組）

- ・一題で二句でも、両題込みで二句でも可。
- ・組数は制限しない。

出句料 一組につき千円

締切 四月十五日（発行所必着）

※投句用紙（三月号に同封）を使用のこと。コピーも可。

なお、令和八年水明全国大会は六月二十八日(日)です。

風 声

○俳句四季二月号「季語を詠む」欄

「鬼平」になりきる吾や蛭汁

○現代俳句二月号「列島春秋」欄

春浅し骨董市の黒電話

○現代俳句二月号「第二回現代俳句『風を詠む』」欄

白熊の吼ゆるや放つ赤き風

切干を鷺掴みにし寮母かな

秩父夜祭神馬の蹄高らかに

山茶花の咲き継ぐ里の校舎跡

讚美歌や白いドレスは緋絨毯

夜焚火の届かぬ会話テレパシ

往きたきは月の都よ兎抱く

旅立ちの風の意のまま冬紅葉

海鳴りの昼に許され河豚の酒

病床の母が鈴振る白障子

○くちら（中尾公彦主宰）二月号「受贈俳誌美術館」欄

水神の眠る湖底ぞ初霞

○こんちえると（関根道豊版元）新年号「受贈誌紙お礼」欄

進むべきその路我に初明り

隊列の靴音のごと朴落葉

丸刈りの遺影に祈る敗戦日

○菜の花（平賀節代主宰）二月号「諸家近詠」欄

瓦斯燈のむかしを偲ぶ枯柳

○劔（山本一步主宰）二月号「受贈誌の一句」欄

名子役老いて悪役秋団扇

鬼之介

元田亮一

秋谷風舎

池田雅夫

大塚茂子

越田栄子

近藤徹平

渋谷きいち

染谷風子

丸山マシミ

島津初花

鳥羽和風

鬼之介

鬼之介

青木鶴城

丸屋詠子

鬼之介

阿部幸代

鬼之介

阿部幸代

阿部幸代

阿部幸代

阿部幸代

阿部幸代

阿部幸代

水明発展基金御礼（敬称略）

— 令和八年二月二〇日現在 —

星野和葉	山本鬼之介	匿名	清山尚己	倉田星步	保坂翔太	小林京子	日高道を	岡田宣子	青木鶴城	秋谷風舎	石田慶子	正木萬蝶	河野はるみ	福田千春	越田栄子	丸山マシミ	清水桂子	皆川更穂	大場順子	平野徹雄	曲淵徹雄	
10	50	20	3	10	1	1	1	1	1	1	2	10	1	10	2	1	1	1	1	2	1	2
□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□
染谷風子	曲淵徹雄	五明昇	日吉亜弥子	多根敏江	元田亮一	三浦真由美	緒方みき子	下川光子	鈴木玲子	石山かつ子	山中みどり	梅澤佐江	染谷風子	松井由紀子	森下美智枝	小山泰生	横山君夫	大塚茂子	木村小麦	田中章嘉	合計	
10	20	10	20	5	1	1	1	1	2	2	2	1	1	2	1	3	1	1	1	1	232	
□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	

〈鼓笛集〉投句について

〈鼓笛集〉投句要領です。刷新して再開します。奮ってご投句してください。

- ・〈鼓笛集〉の投句は四月からです。七月号から掲載いたします。
 - ・水明集同人が投句することが出来ます。
 - ・当季雑詠で一句を投句します。
 - ・毎月十五日締切です。
 - ・選者は、〈鼓笛賞〉選考委員の石井喜恵、青木鶴城、日高道をが順次月替わりで選を行います。
- ※巻末の所定の投句用紙を使用してください。

主 宰 山本鬼之介
編集長 網野月を

通信添削指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信添削指導を実施しています。
希望者は、下記により作品を送って下さい。

主宰 山本鬼之介

[指導者] 網野月を

[作 品] 5句 [受講料] 1,000円

[方 法] ①用紙自由 ②住所・氏名・電話番号を明記 ③110円切手を同封 ④返信用封筒は 不要 ⑤締切なしで随時受付

[送付先] 網野月を

電話 080-7580-0208

〒338-0012 さいたま市中央区大戸1-31-2

後記

四月号をお届け致します。皆様からのご支援の御言葉に励まされながら、編集作業を進めております。今後ともよろしくお願い申し上げます。

半年間お休みしていた「鼓笛集」をリニューアルオープンします。水明集同人の皆様は毎月お投句出来ます。奮ってご参加ください。

さて去る三月七日には埼玉県現代俳句協会の総会が桶川市のさいたま文学館で行われました。水明からも多数の出席者がございました。

その中で第二十三回埼玉県現代俳句大賞の発表と表彰式がおこなわれ、水明からは本橋稀香さんが、「私雨」の作品で見事に準賞を受賞されました。心からお喜び申し上げます。

また二十一日には上野・東天紅で現代俳句協会総会も予定されています。水明からも多数の現代俳句協会会員が出席の予定です。

こうして水明俳句会が、積極的に俳壇に対して広角に展開していることはこれからの水明俳句会の力になるであろうと考えております。

さて、私の家の庭の木蓮が六日に咲き始めました。昨日と今日は幾分気温が低めで咲き進みませんでした。今週は見頃であろうと思えます。冬の間に何もなかった庭に純白の木蓮は、春を招き入れるスプライトのようです。オスカール・ワイルドの「わがままな大男」を惹起しました。配役は全く異なりますが、木蓮の次は満天星が咲きます。そして楓の芽が吹きます。同じころに木蓮も芽吹きます。狭い庭ですが確実に春の訪れを演出してくれます。(月を)

今月のはてな？

木酢(きざわし)
巻織汁(けんちんじる)

白起(うすおこし)
痞(つかえ)

狛鼻深(げいびけい)
素話(すばなし)

井華水(せいかすい)
希(まれ)

発条(ぜんまい)
三月号に誤記がありました。

お詫びして訂正いたします。

正 将又(はたまた)
誤 將軍

水明発行所受付時間

(048-822-4741)

曜日：(月・火・水・木・金)

時間：12時半～午後4時半

(土・日・祭日は休み)

水明の行事と重なった時は休み

(上記の時間には係がおりますので、

ご利用の方は 時間内をお願いします。)

頁 8 9 12 24 33 39 48 58 65

水明

令和八年四月号

通巻一四七号

令和八年四月一日発行

発行所

水明俳句会

〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四一〇二二

電話 048-822-4741

ホームページ

「水明俳句会」で検索

誌代 半年分 六、〇〇〇円

一年分 一二、〇〇〇円

同人費(誌代を含む)

一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費(誌代を含む)

一年分 三〇、〇〇〇円

振替〇〇一七〇一〇一九三九三

発行人

山本 鬼之介

印刷所

中央美版

季音抄

山本鬼之介

武甲山の影絵の遠し寒に水
衣擦れの音なき音や雪女
冬の夜や生きる長旅継ぎ足して
大寒や息吐くやうに独り言
三日めや有無を言はせぬ蜆汁
思ひ出の人みな遠し寒四郎
寒の明け天金の書を書棚より
左義長やジャンヌ・ダルクが立ち上がる
立春の序章となりぬ宮太鼓
灰の尉はらりと落ちぬ冬の夜半
朧月独り旅立つかぐや姫
夕空を飛行機の腹日脚伸ぶ
専女まへとて紅も差します水仙花
遠き灯は我が家の明り雪野ゆく
山唸る今夜あたりは雪女
捨てがたき天動説や初日の出
深爪の疼き深深冬の暮
陸奥の飛白のもんぺ春まぢか

網野月を
石井喜恵
井上燈女
石山かつ子
大橋廸代
大村節代
青木鶴城
正木萬蝶
大場順子
原田秀子
近藤徹平
曲淵徹雄
清水桂子
横山君夫
池田珪子
保坂翔太
越田栄子
染谷風子

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内
(句に雑誌名、句集名、刊行月を付す)

▼散歩道へ身辺トピック

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内
(題をつけて)

▼山紫水明へ随筆

テーマ：自由
枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

水 明 抄

山本鬼之介

冬の靄まぼろしのごと一里塚
 トロ箱の水一閃鯉の青
 目覚むれば星の囁く霜夜かな
 鱸酒や海峡越しに門司の街
 ぼつねんと丸いポストが冬の月
 樅と松並ぶ店先十二月
 冬の月自分と対話する無音
 穏やかに夫黄落をみつめをり
 終バスを降りひとり占め冬の月
 冬ざれや貝塚眠る町外れ
 大絵馬の馬蹄の響き初詣
 大陸はもともと一つ冬至風呂
 みちのくの背骨は太し雪下し
 禪をしめてかかるや初衣裳
 初雪の微かな重み傘の上
 冬蝶よ力尽くまで野に遊べ
 鱸酒の焰白木のカウンセタ
 枕辺の小さき長靴クリスマス

霜多光代
 皆川更穂
 反町修
 倉田星歩
 飯田忠男
 寺町知子
 綿引まりこ
 本橋稀香
 田中弘子
 阿部幸代
 丸屋詠子
 石関六弦
 森下山菜
 小林京子
 岡田宣子
 菅原真理
 杉浦千祐
 川島夕峰

水明例会案内	句会名	日時	会場	指導者	幹事
	第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	菅原卓郎 小林京子
	第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山中みどり 青木鶴城
	第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
	第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	石井喜恵 反町恵修
	第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	河野はるみ 岡田宣子
	若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木萬蝶 石田慶子
	関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化(セ)	大橋勉代	森本早苗

水 明

令和八年四月一日発行 毎月一日発行

(第九十九卷 第四号)

定価 一〇〇〇円